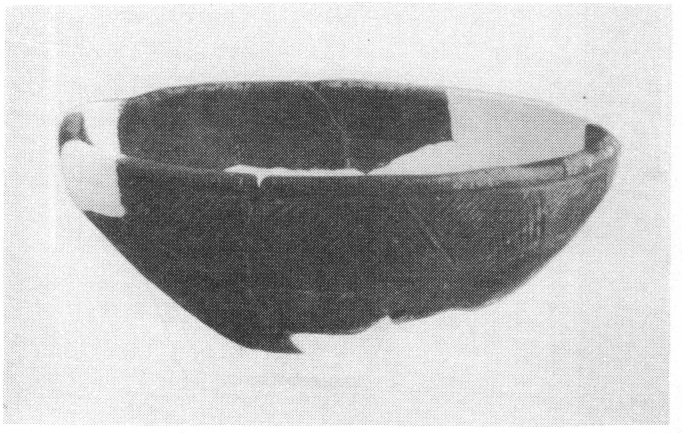
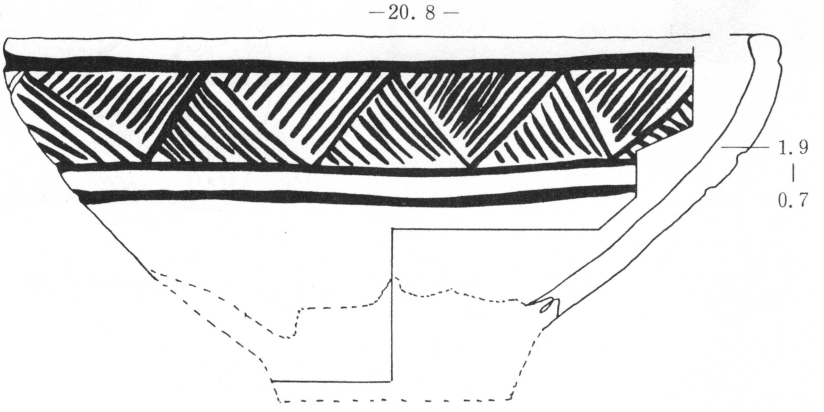
163



ＡＫ２Ⅲ

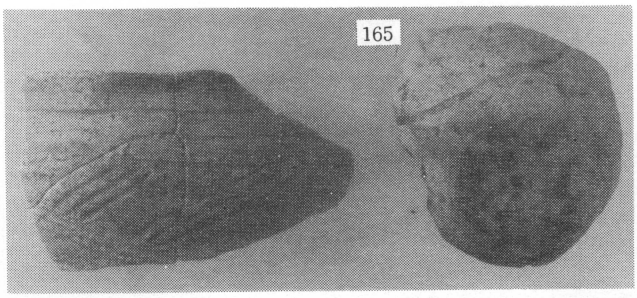


〔後期の土器〕第４群土器－163

☆　このものは、ＡＫ２Ⅲ出土の「十腰内Ⅰ式」、「同Ⅱ式」の中間をなす一連の土器群の一つである。

- このものの器形は、鉢形土器で、平縁で肩部～口頸部は、内傾する器形である。このものは、大小破片12ケで出土したものを復原した。なお、このものの底部は欠失しているため不明である。
- 施文は、口縁が平縁であるが、口縁直下に１条の沈線文がめぐり、胴部上半にも２条の沈線文が施文され、この三者によって区画される口頸部には鋸歯状の沈線によって区画される三角形の中に左下り（右下り）に斜向する沈線が10～12条施文されるものである。胴部下半は無文で研磨されている。（☆沈線と言うよりも刻文と表現する方が良いと考えられる。）☆（このものも、類例を待って再考したい。）
- 色調は、内面黒褐色、外面も黒褐色である。胎土・焼成とも最良で堅緻である。

164

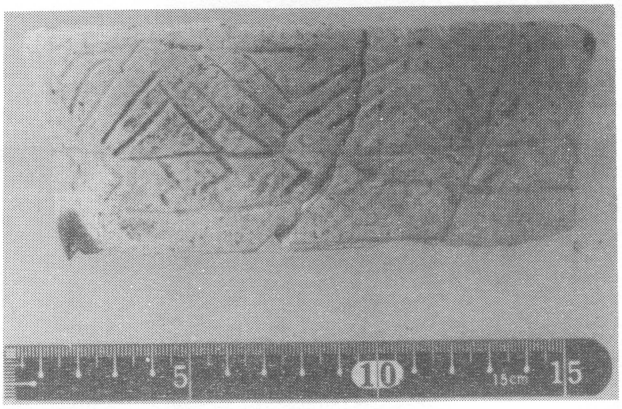


164 ＡＫ１Ⅱ

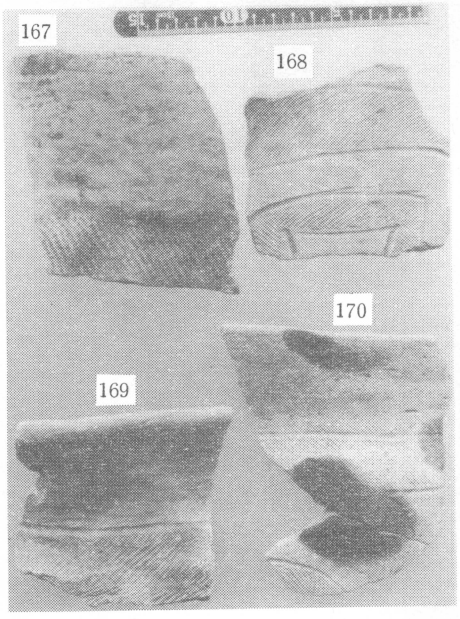
165 ＡＫ２Ⅱ

第３群土器

166



166 ＡＬ１Ⅲ



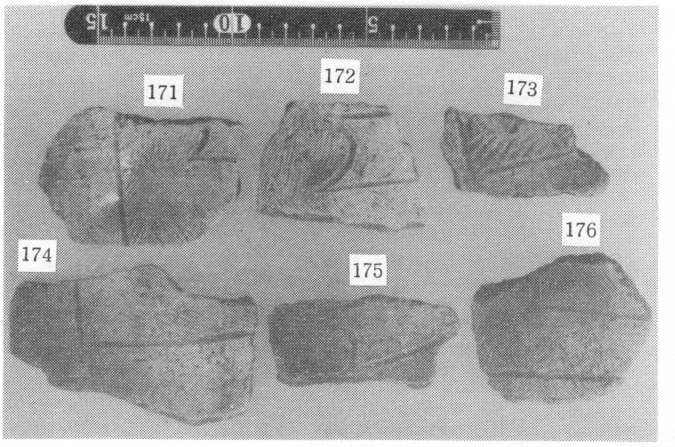
167 ＡＫ１Ⅱ
168 ＡＮ１ｂ－Ｂ１Ⅲ
169 ＡＫ２Ⅲ
170 ＡＬ１Ⅲ

☆　（164・165）のうち（164）は甕形，（165）は底部である。

☆　（166）は「重山形文」と垂下する「鋸歯状文」がある。

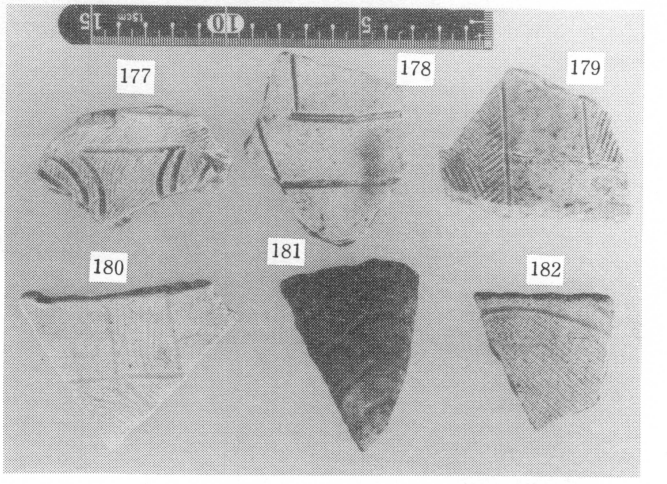
☆　（167・169・170）は、無文帯－施文帯のパターンを認めるもので、（168）は、方形～菱形区画文が施文されるものである。

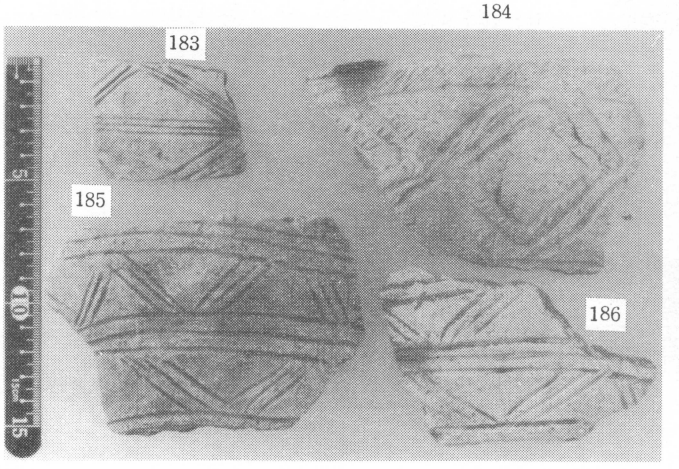
◉　これらの（164～170）は、施文例のサンプルとして掲示した。



171 A L 1 Ⅲ
172 A L 1 Ⅲ
173 A N 1 b－A 2 Ⅱ
174 A L 1 Ⅲ
175 A L 1 Ⅲ
176 A L 1 Ⅲ

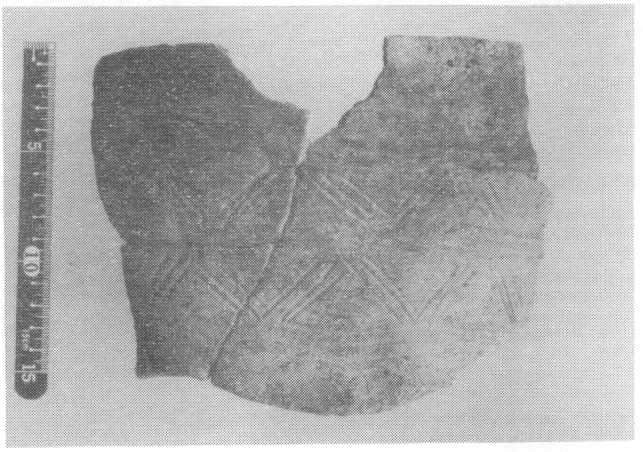
177 A N 1 b－B 1 Ⅲ
178 A N 1 b－B 1 Ⅱ
179 A K 2 Ⅲ
180 A K 2 Ⅲ
181 A N 1 b－B 1 Ⅱ
182 A N 1 b－B 1 Ⅱ

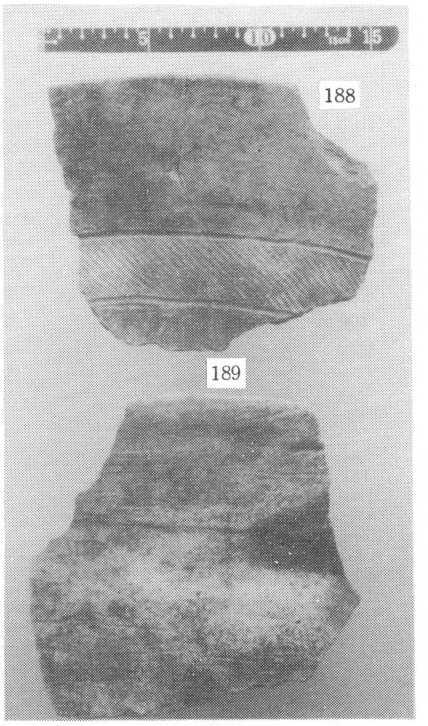




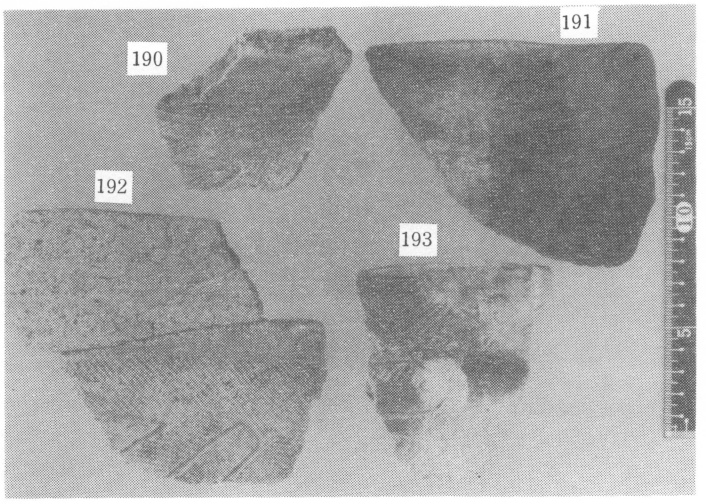
183 K 2 Ⅲ
184 K 2 Ⅲ
185 K 1 Ⅱ
186 A L 1 Ⅲ

187



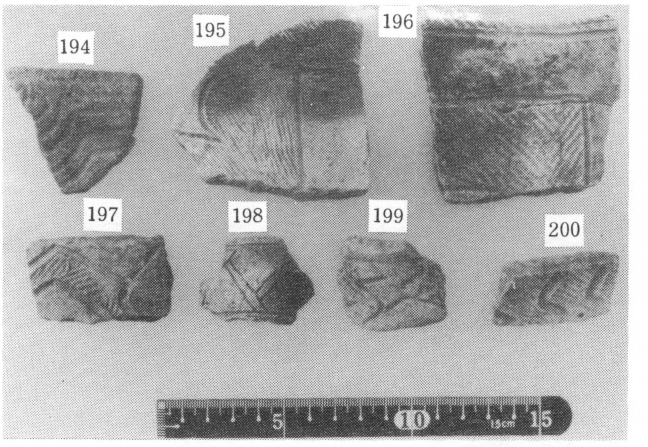


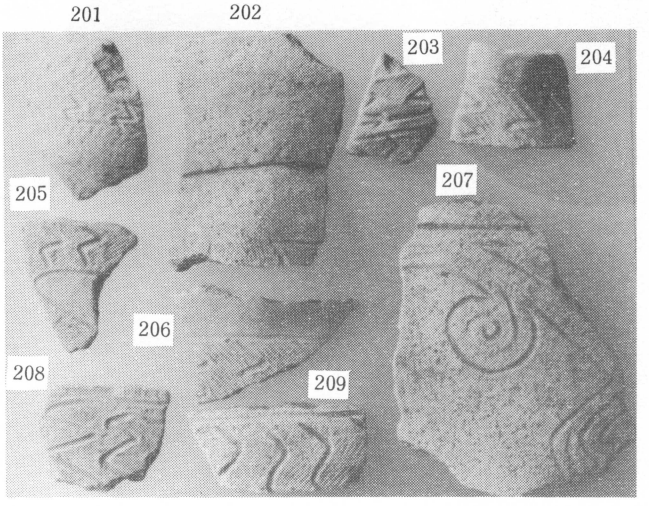
187 A K Ⅲ
188 A N 1 b－B 1 Ⅱ
189 A K 1 Ⅱ



190 A N 1 b－A 2 Ⅱ
191 A K 1 Ⅱ
192 A L 1 Ⅲ
193 A K 2 Ⅱ

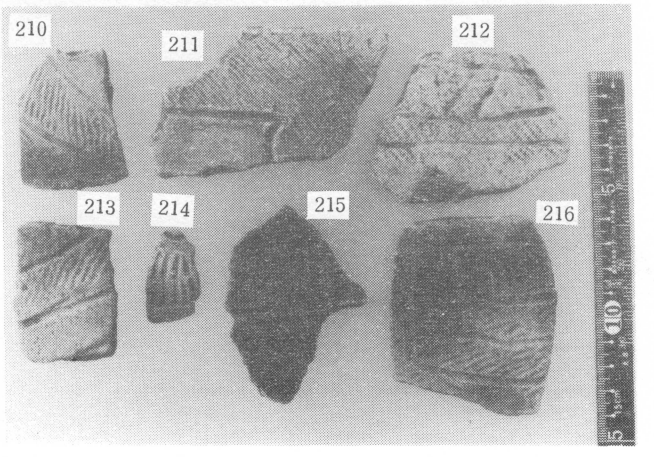
194 AK 1 Ⅱ
195 AK 1 Ⅱ
196 AN 1 b－B 1 Ⅲ
197 AK 1 Ⅱ
198 AN 1 b－B 1 Ⅲ
199 AN 1 b－B 1 Ⅲ
200 K 2 Ⅲ



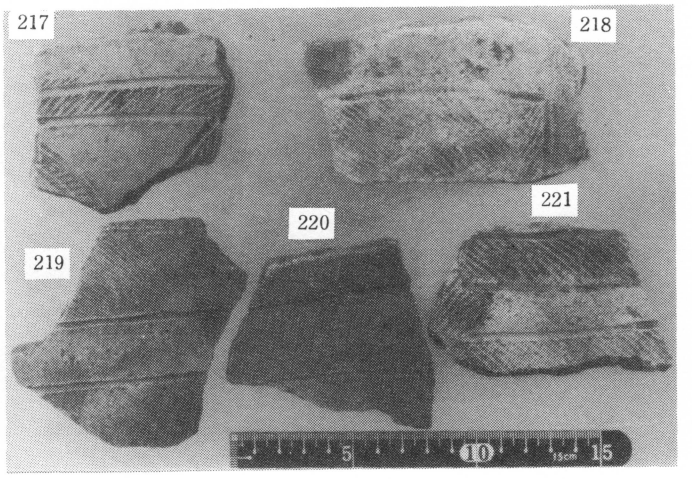


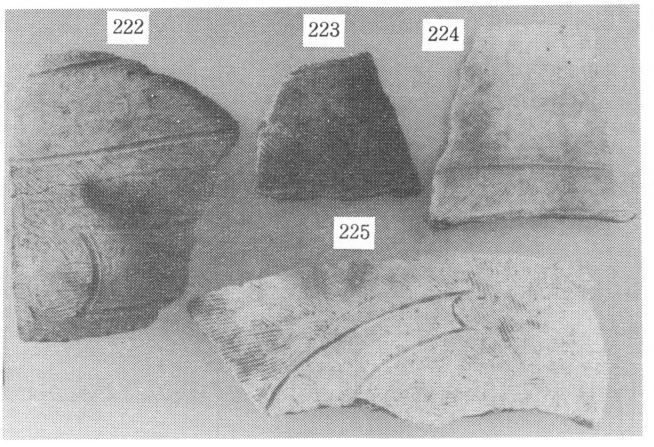
201 AK 2 Ⅲ
202 AL 1 Ⅲ
203 AK 1 Ⅱ
204 AK 2 Ⅲ
205 AK 1 Ⅱ
206 AK 2 Ⅲ
207 AK 2 Ⅲ
208 AK 1
209 AN 1 b－B 1 Ⅱ

210 M_{10} Ⅱ
211 K 1・2 Ⅱ
212 AL 1 Ⅲ
213 AL 2 Ⅲ
214 AN 1 b－B 1 Ⅲ
215 AN 1 b－A 2 Ⅱ
216 AN 1 b－A 2 Ⅱ

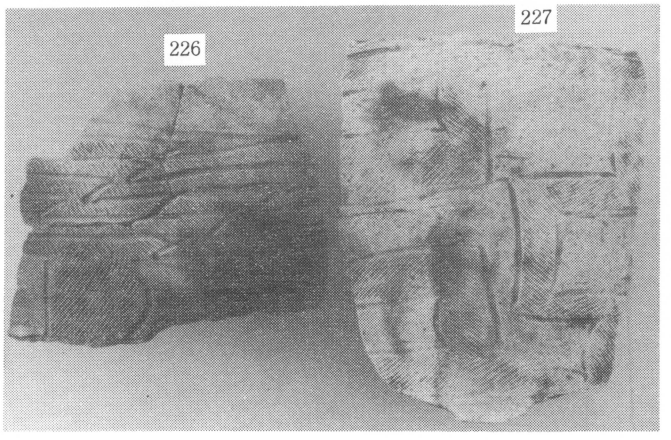


217 ＡＮ１ｂ－Ａ２Ⅱ
218 ＡＬ１Ⅱ
219 ＡＬ１Ⅲ
220 ＡＬ１Ⅲ
221 ＡＬ１Ⅱ



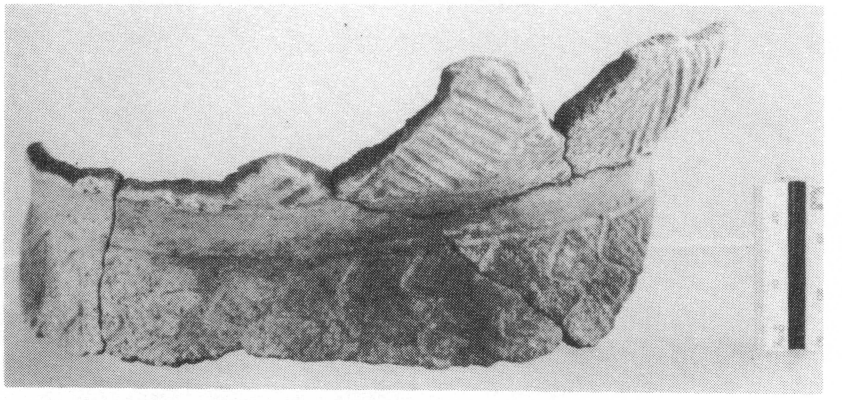


222 ＡＫ１・２Ⅱ
223 ＡＮ１ｂ－Ｂ２Ⅱ
224 ＡＫ１Ⅲ
225 ＡＫ１・２Ⅱ



226 ＡＮ１ｂ－Ｂ１Ⅲ
227 ＡＮ１ｂ－Ｂ１Ⅲ

228



ＡＫ１Ⅱ

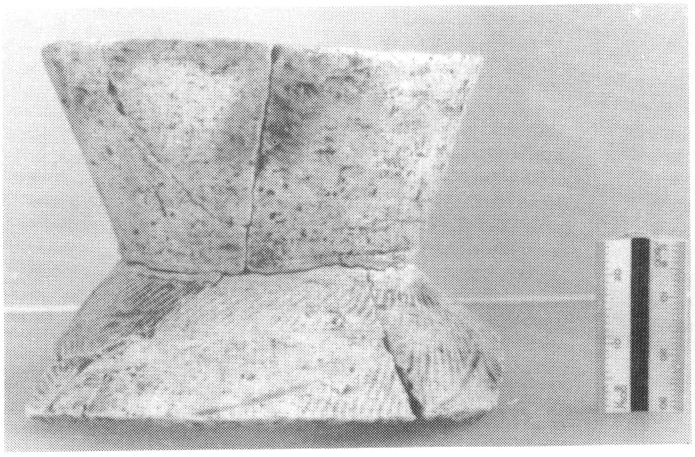
〔後期の土器〕第４群土器－228

☆　（228）は、ＡＫ１Ⅱ出土の「十腰内Ⅰ式」「同Ⅱ式」の中間型式である甕形土器である。

- このものの器形は、不明であるが、口頸部が外反し、肩部が丸味をもってふくらむもののようである。
- 施文は、口頸部に、「重山形文」、肩部に垂下する「Ｓ字状文」が施文される。
- 色調は、赤褐色である。（内外とも）

◉　このものは、口頸部の「重山形文」と肩部の「Ｓ字文」との組み合わせがわかる資料として示した。

229

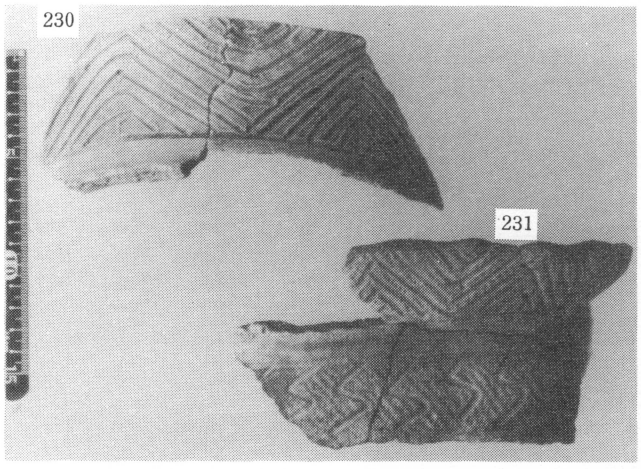


ＡＮ１ｂ－Ｂ１Ⅱ

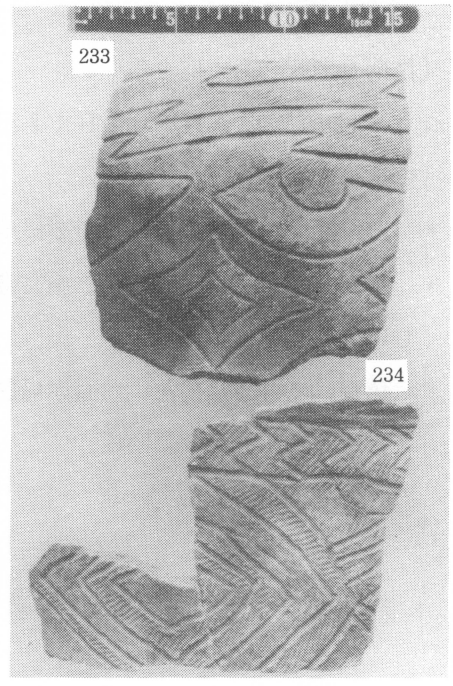
〔後期の土器〕第４群土器－ 229

☆　（229）は、ＡＮ１ｂ－Ｂ１Ⅱ出土の、「十腰内Ⅰ式」「同Ⅱ式」の中間型式である壺形土器である。

- 器形は、Ｐ・Ｐ・Ｌ22－ 162 に示した壺形土器と同様の器形と思われる。
- 施文は、無文帯の口頸部と施文帯に分かれており、（162）と近似する施文のものらしい。
- 色調は、外面暗褐色、内面赤褐色を呈し、胎土・焼成は良い。



230 ＡＫ２Ⅲ
231 ＡＫ１Ⅱ
232 ＡＫ２Ⅱ
233 ＡＫ２Ⅲ
234 ＡＫ１Ⅱ

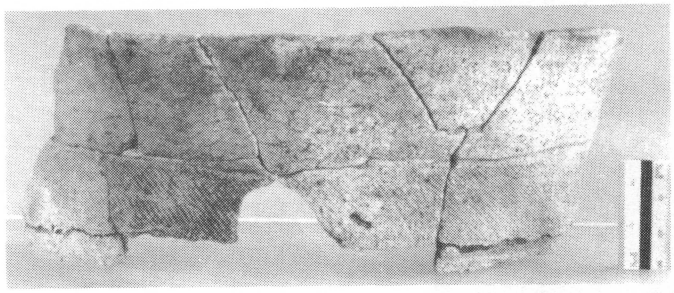


◉　ここに示した（230 ～ 234）も第４群土器として掲示したが文様の組み合わせの好例として掲げた。

- このうち、（232 ～ 234）のうち、（232・233）は、同一箇体で、一応第４群土器としたが、さらに新しい可能性もある。（234）は、施文パターンが「重菱形文」である。
- 色調は、外面暗褐色、内面黄褐色で、胎土・焼成は良い。

〔後期の土器〕第４群土器（甕形）　　P・P・L32

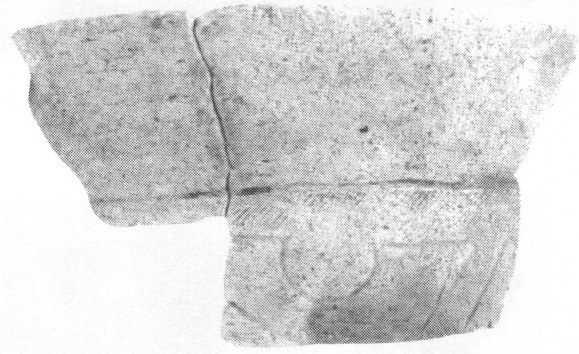
235



235 ＡＮ１ｂ－Ｂ１Ⅲ

236 ＡＮ１ｂ－Ｂ１Ⅲ

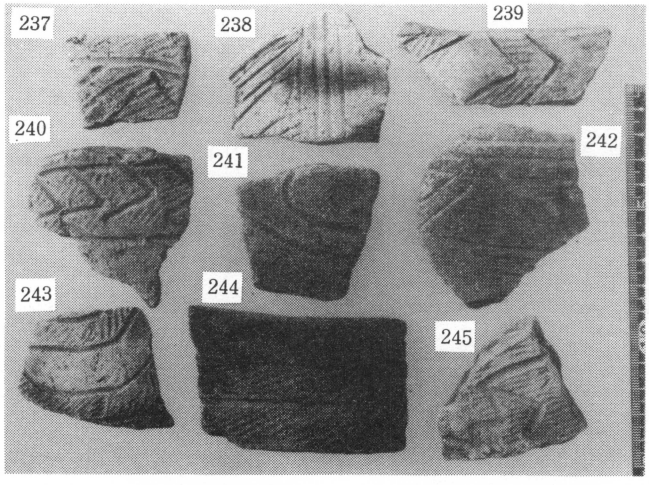
236



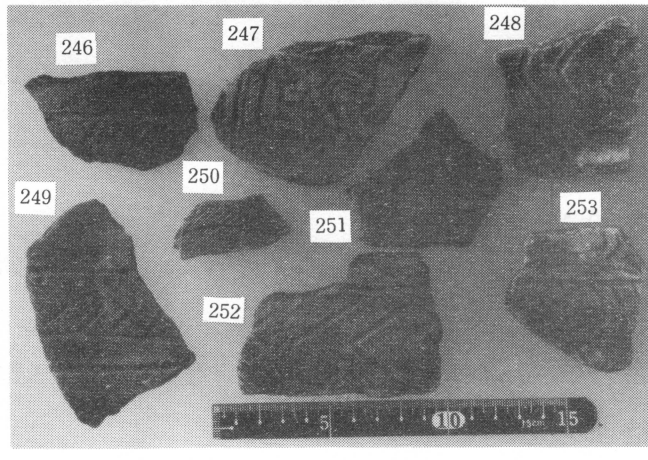
〔後期の土器〕第４群土器－ 235 ・ 236

☆　（235 ・ 236）は、ＡＮ１ｂ－Ｂ１Ⅲ出土の「十腰内Ⅰ式」「同Ⅱ式」の中間型式に位置する大形甕形土器破片である。

- 全体器形は不明だが、平縁で口頸部が外反し、肩部がふくらむものらしい。施文は、「無文帯－施文帯－無文帯」というパターンと思われる。
- 色調は、両者とも、内外ともに黄褐色を呈する。胎土には砂粒を含むが焼成は良い。

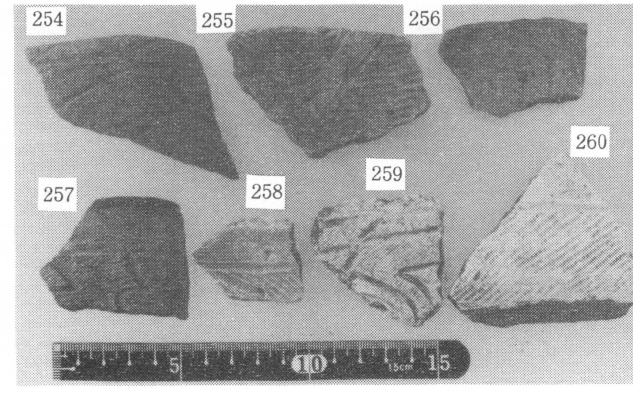


237 A N 1 b—B 1 Ⅲ
238 A L 1 Ⅲ
239 M11 Ⅱ
240 A L 1 Ⅲ
241 A L 1 Ⅱ
242 A L 1 Ⅲ
243 A L 1 Ⅲ
244 A L 1 Ⅲ
245 M11 Ⅱ

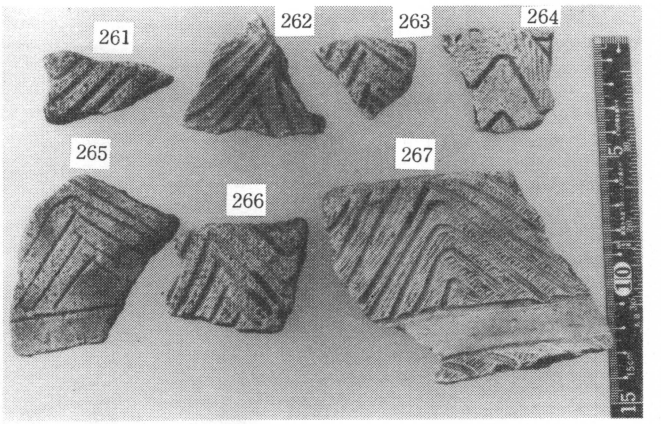


246 A K 1 Ⅱ
247 A N 1 b－B 1 Ⅲ
248 A K 1 Ⅱ
249 A N 1 b－B 1 Ⅲ
250 A K 2 Ⅲ
251 A K 1 Ⅱ
252 A K 1 Ⅱ
253 A K 2 Ⅲ

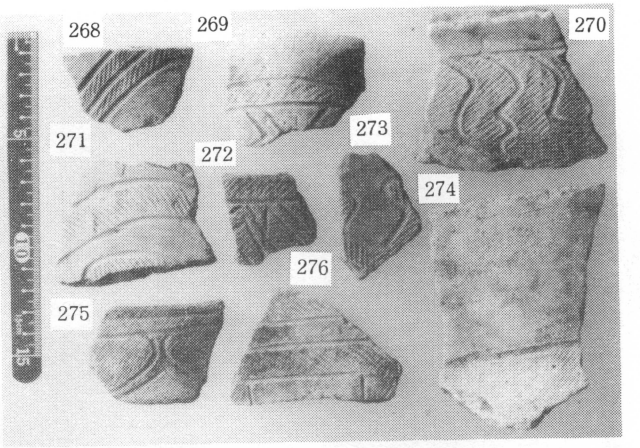
254 A K 1 Ⅱ
255 A K 1 Ⅱ
256 A N 1 b－B 1 Ⅱ
257 A K 1 Ⅱ
258 A K 1 Ⅱ
259 A N 1 b－B 1 Ⅲ
260 A N 1 b－B 1 Ⅲ



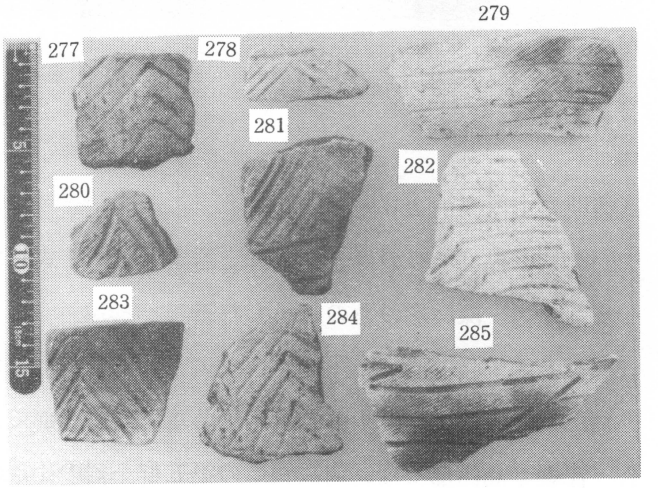
261 A K 1 Ⅱ
262 A K 1 Ⅱ
263 A K 1 Ⅱ
264 A K 2 Ⅲ
265 A K 2 Ⅲ
266 A K 2 Ⅱ
267 A K 2 Ⅱ



268 A K 1 Ⅱ
269 A N 1 b－B 1 Ⅱ
270 A L 1 Ⅲ
271 A K 2 Ⅲ
272 A K 1 Ⅱ
273 A N 1 b－B 1 Ⅲ
274 A L 1 Ⅲ
275 A L 1 Ⅱ
276 A K 1 Ⅱ

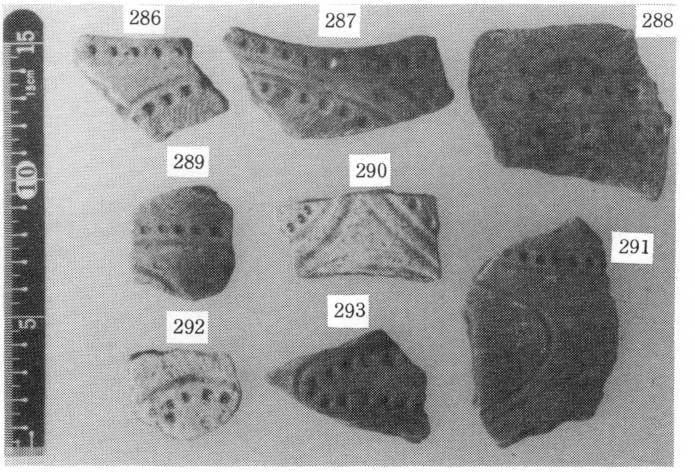


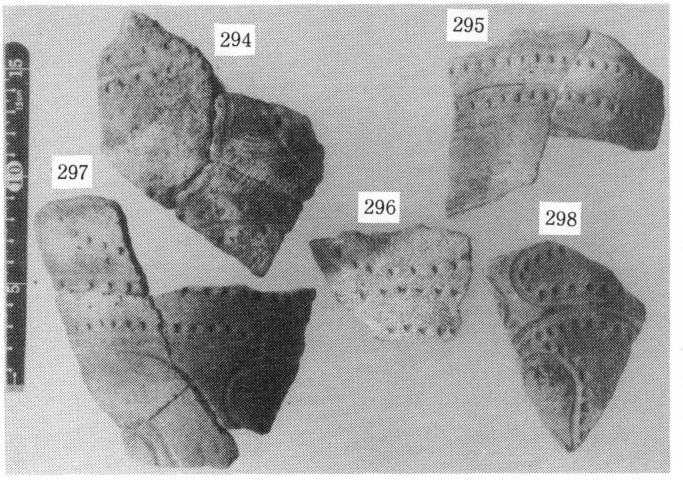
277 A L 1 Ⅲ
278 A L 1 Ⅲ
279 A N 1 b－B 1 Ⅲ
280 A L 1 Ⅱ
281 A N 1 b－A 2 Ⅱ
282 A L 1 Ⅲ
283 A L 1 Ⅲ
284 A L 1 Ⅲ
285 A K 1 Ⅱ



〔後期の土器〕第５群土器　　P・P・L35

286 ＡＮ１ｂ－Ｂ１Ⅲ
287 ＡＮ１ｂ－Ｂ１Ⅲ
288 ＡＬ１Ⅲ
289 ＡＮ１ｂ－Ａ２Ⅲ
290 ＡＫ２Ⅲ
291 ＡＮ１ｂ－Ｂ１Ⅱ
292 ＡＮ１ｂ－Ｂ１Ⅱ
293 ＡＮ１ｂ－Ｂ１Ⅲ





294 ＡＬ１Ⅱ
295 ＡＮ１ｂ－Ｂ１Ⅲ
296 ＡＬ１Ⅲ
297 ＡＮ１ｂ－Ｂ１Ⅲ
298 ＡＮ１ｂ－Ｂ１Ⅲ

〔後期の土器〕→286～298

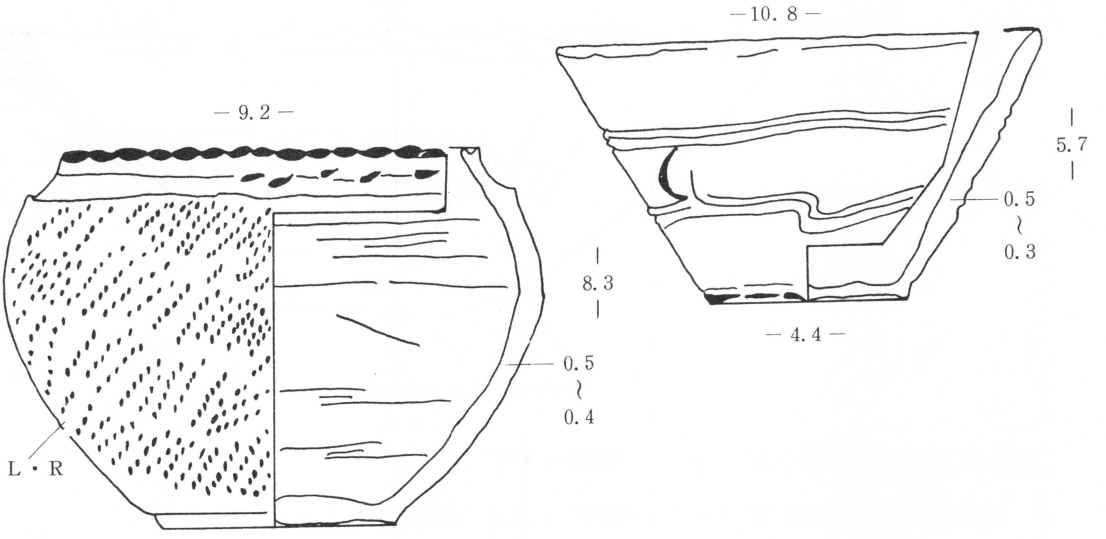
☆　ここに掲げたものは、第五群土器（十腰内Ⅱ式）である。いずれも破片であるが、器形は、甕～深鉢形のものと思われる。

☆　この「十腰内Ⅱ式」土器は、（表Ⅰ）に示したとおり第一次発掘調査から出土があった。本年度の出土は少なく、掲示したもので全部である。

☆　津軽半島西部では、何故かこの第五群土器の出土が少ない。

299　　300

AK２Ⅲ　　AK１Ⅱ



〔晩期・後期の土器〕第３・６群土器－300・299→（粗製）

☆　（299）はＡＫ２ Ⅲ出土の「大洞Ｃ１式」無頸壺形土器、（300）はＡＫ１ Ⅲ出土の「十腰内Ⅰ式」鉢形土器である。

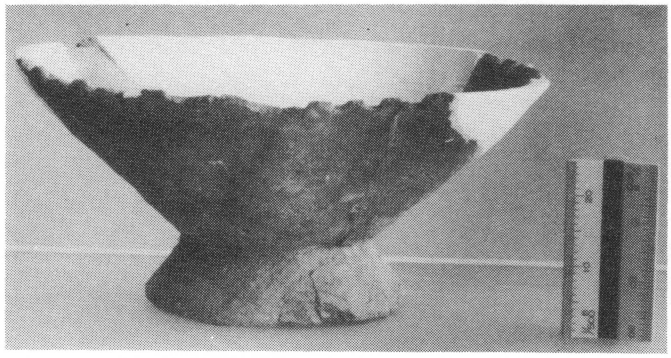
- （299）は口縁が小波状を呈し、頸部は内傾し肩部が張る器形で底面はやや上げ底を呈する。
- （300）は、平縁で逆台形をなす器形で底面はやや上げ底である。

施文は、（299）は胴部に２段単節Ｌ・Ｒ縄文が施文される。（300）は細い３条の沈線文が２段に波状を呈して施文される。

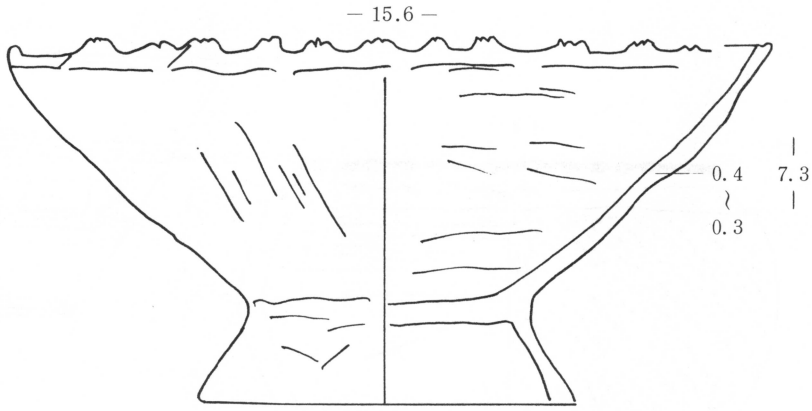
- 色調は、（299）が内外とも赤褐色、一部黒色を呈する。（300）は内外とも赤褐色を呈し、（299・300）とも胎土・焼成ともに良い。

〔晩期の土器〕第６群土器　　P・P・L37

301



ＡＫ２Ⅲ

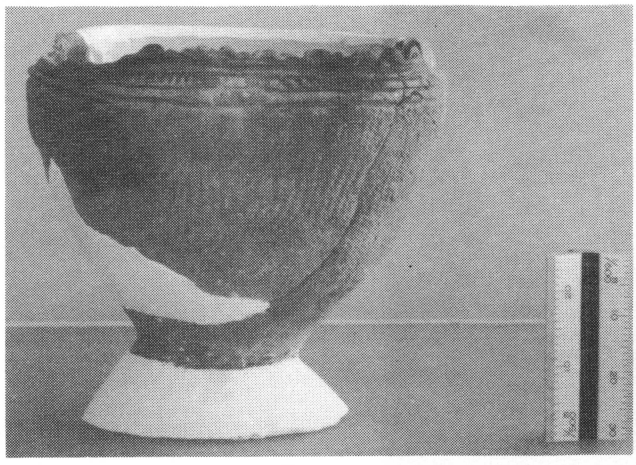


〔晩期の土器〕第６群土器－ 301　（粗製）

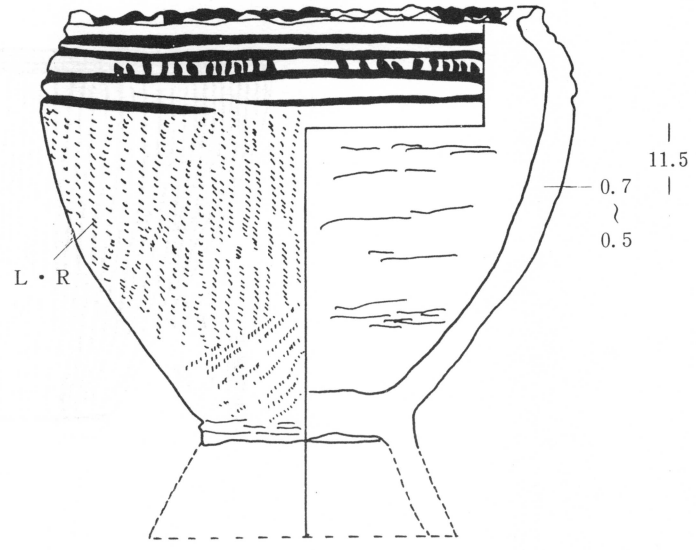
☆　このものは、ＡＫ２ Ⅲ出土の「大洞Ｃ１ 式」台付浅鉢形土器である。

- このものの器形は、口縁が連続する山型の小突起をもつもので、弱いふくらみをもつ浅鉢部を有するもので、台部は末広がりのものである。
- 施文はなく、無文のものであるが擦痕が認められる。
- 色調は、内外とも明黄褐色、胎土・焼成とも良く堅緻である。

302



ＡＫ２Ⅲ



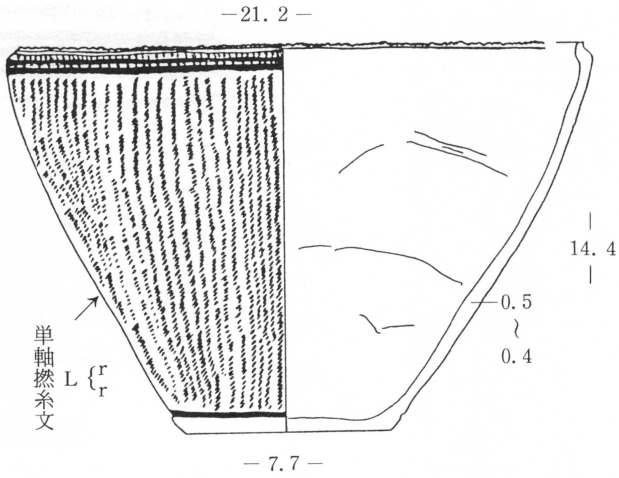
〔晩期の土器〕第６群土器－302　（粗製）

☆　（302）は、ＡＫ２Ⅲ出土の「大洞Ｃ１式」台付鉢形土器である。

- 器形は、口頸部は外反し、肩部は丸味をもってふくらみ、胴部もまたふくらむ器形で台部は欠失している。
- 施文は、波状口縁に不規則な刻目があり、肩部には平行沈線文が３条と刻目文が施文され、さらにその下に１条の沈線文があり、胴部には、縦位と左下りの縄文が施文される。
- 色調は、外面灰黒色、内面黄褐色一部灰黒色を呈する。胎土・焼成とも良い。

303

ＡＮ１ｂ－Ｂ１Ⅱ

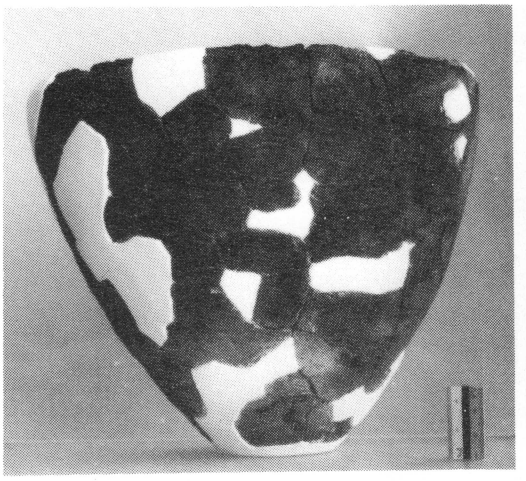


〔晩期の土器〕第６群土器－303　（半精製）

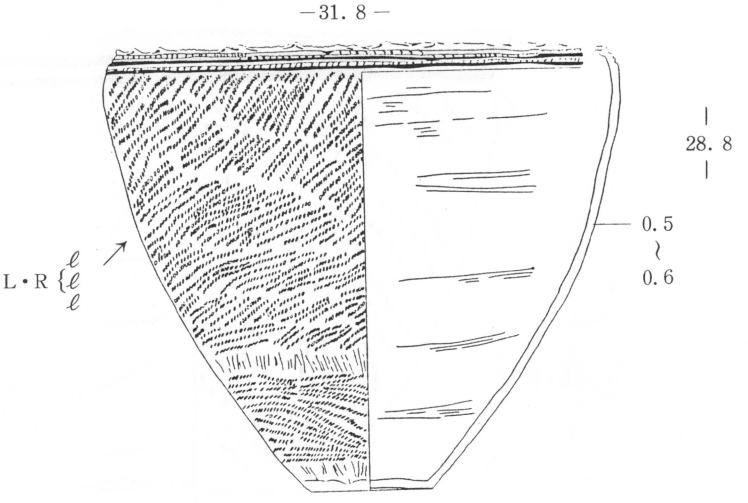
☆　この（303）は、ＡＮ１ｂ－Ｂ１Ⅱ出土の「大洞Ｃ１式」鉢形土器である。

- このものは、口縁は小波状を呈し、口頸部が強く内傾し肩部が張る器形のもので、底面は平底である。
- 施文は、口頸部に刻目文と沈線文がめぐり、肩部下より底部へ縦位の単軸撚糸文が施文されるものである。
- 色調は、外面明黄褐色、内面上半黒色、下半黄褐色を呈し、胎土・焼成とも最良である。

304



ＡＮ１ｂ－Ｂ１Ⅱ

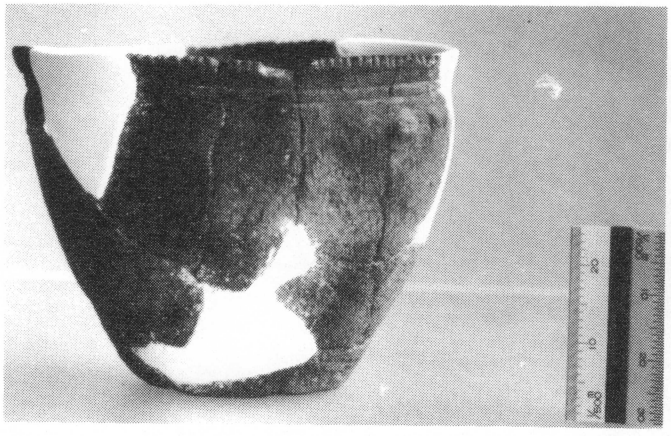


〔晩期の土器〕第６群土器－ 304　（粗製）

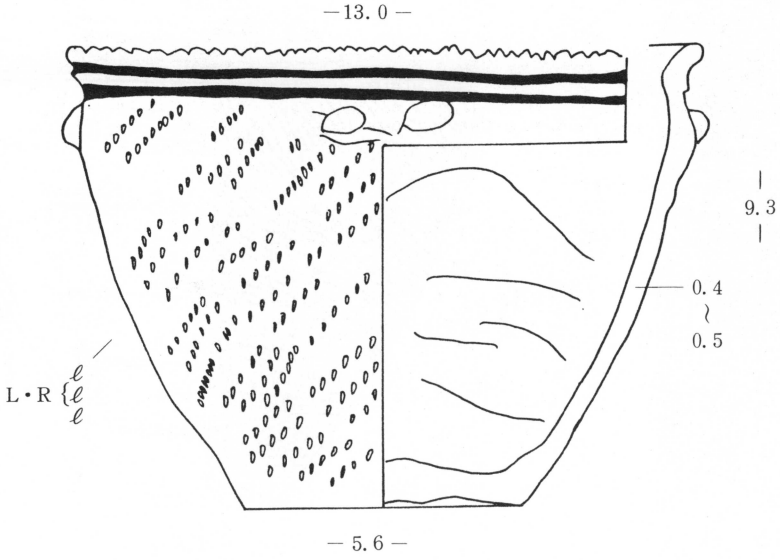
☆　（304）は、ＡＮ１ｂ－Ｂ１Ⅱ出土の「大洞Ｃ１式」大形鉢形土器である。

- このものの器形は、口縁が小波状を呈し、口頸部が外反し、肩部が丸味をもってふくらむもので底面は上げ底を呈する。
- 施文は、口頸部に平行沈線文があり、この頸部〜肩部上には「大洞Ｃ１式」の主文様である「刻目文」が二段に施文される。また、胴部には、縄文が密に施文されるものである。
- 色調は、外面灰黒色（下半赤褐色）、内面灰黒色を呈する。胎土・焼成は良い。

305



ＡＮ１ｂ－Ｂ１Ⅱ

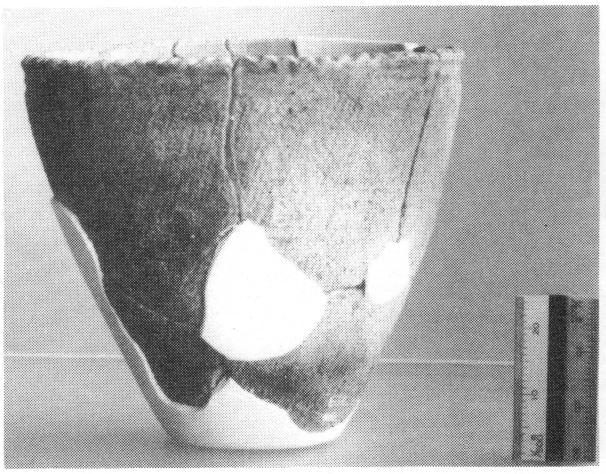


〔晩期の土器〕第６群土器－ 305　（粗製）

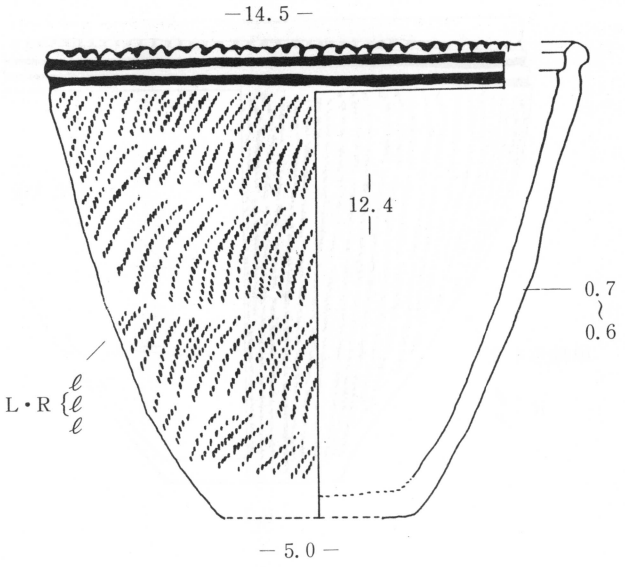
☆　（305）はＡＮ１ｂ－Ｂ１Ⅱ出土の「大洞Ｃ１式」鉢形土器である。

- このものの器形は、口縁には刻目を有し小波状をなす。口頸部は外反するもので底面は上げ底を呈するものである。
- 施文は、頸部に２条の沈線文をめぐらせ、肩部には２こ１対の粘土粒を４対付すものである。施文されている縄文は粗であるが、０段多条のＬ・Ｒと思われる。
- 色調は、外面灰赤褐色、内面上半黒色下半赤褐色を呈し、胎土・焼成やや不良なものである。

306



ＡＫ２Ⅱ

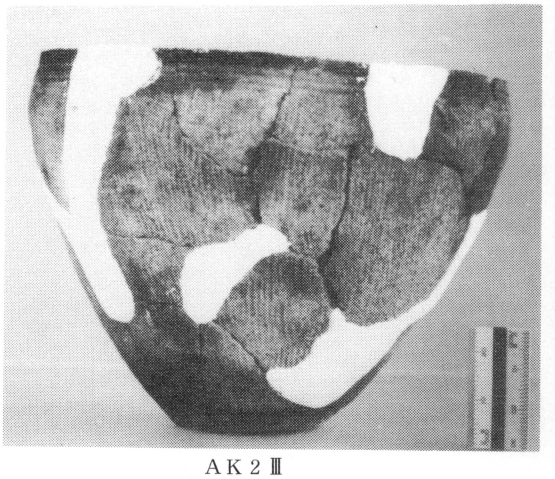


〔晩期の土器〕第６群土器－306　（粗製）

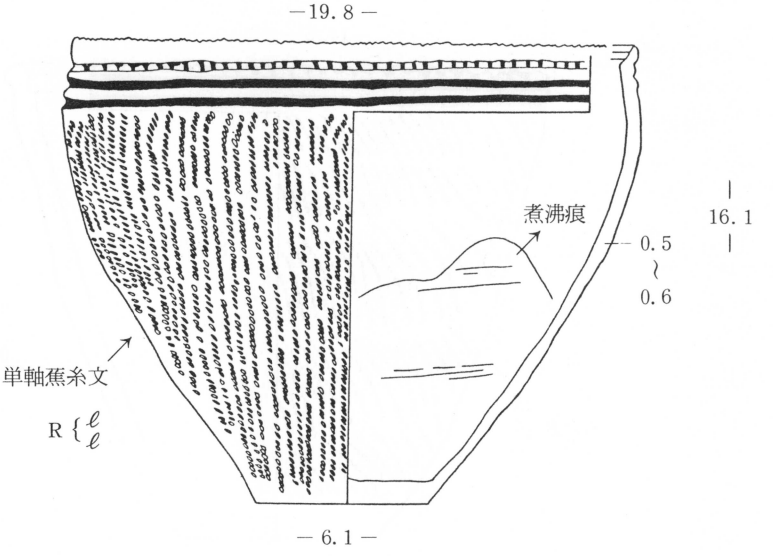
☆　このものは、ＡＫ２Ⅱ出土の「大洞Ｃ１式」鉢形土器である。

- 器形は、口縁に刻目を有し、肩部がわずかに張るもので、頸部に２条の沈線文がめぐるものである。
- 肩部下には、左下がりの縄文（０段多条）が施文される。
- 色調は、外面黒褐色一部赤褐色、内面明燈色を呈し、胎土には細砂を含み、器表面がザラザラしているが、焼成は良い。

307



ＡＫ２Ⅲ

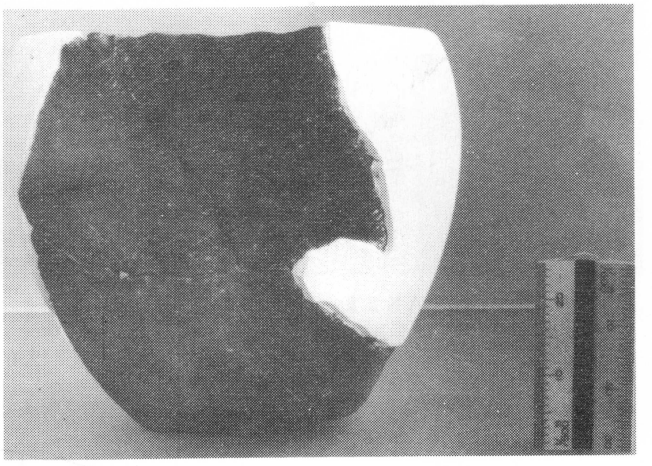


〔晩期の土器〕第６群土器－307　（粗製）

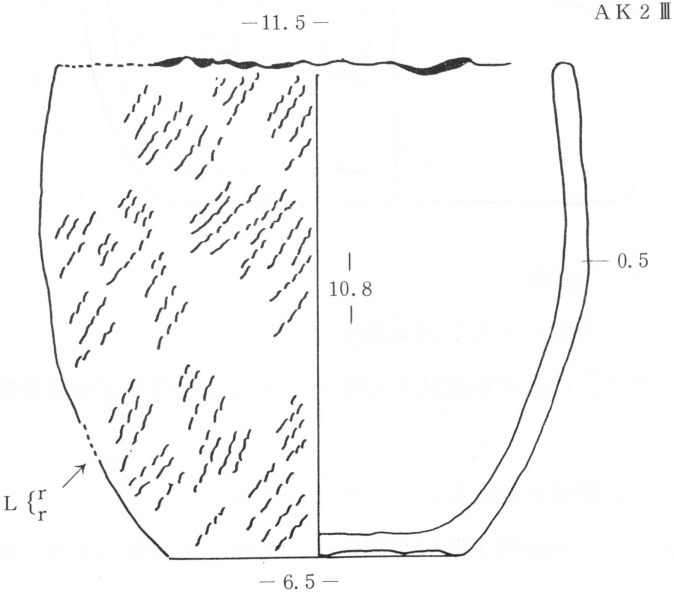
☆　（307）は、ＡＫ２Ⅲ出土の「大洞Ｃ１式」鉢形土器である。

- このものは、口頸部が外反し、肩部が丸味をもつ器形で底面は平底である。
- 施文は、頸部に刻目文があり、肩部に２条の沈線文がめぐり、肩部下より底部上までは縦走する撚糸文が施文されるものである。
- 色調は、外面黒褐色一部灰黒色、内面上半黒色下半黄褐色を呈する。胎土・焼成やや不良である。

308



AK２Ⅲ

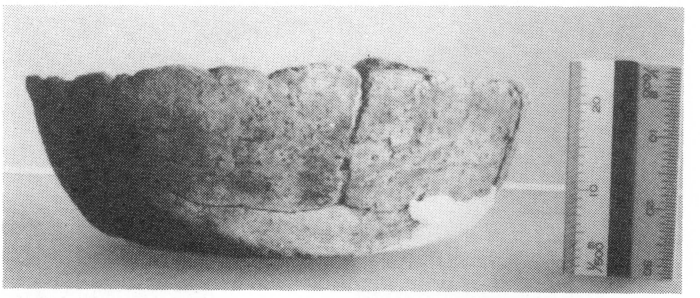


〔晩期の土器〕第６群土器－308　（粗製）

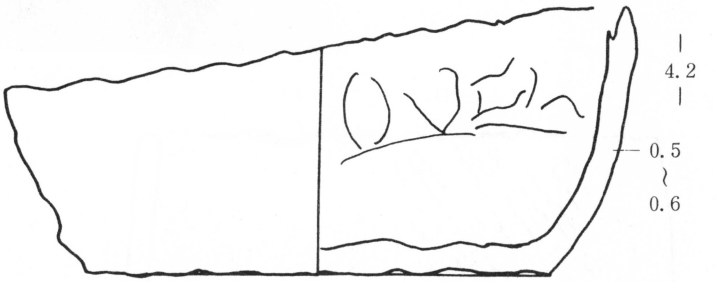
☆　この（308）としたものは、AK２Ⅲ出土の「大洞C１式」鉢形土器である。

- 器形は、口縁が小波状を呈し、胴中央がふくらみ、底部がやや上げ底を呈するものである。
- このものは、口縁下より底部直上まで、撚糸による押圧縄文が施文されるものである。
- 色調は、外面赤褐色一部黒色、内面灰黒色を呈し、胎土・焼成とも良く堅緻なものである。

309



ＡＫ２Ⅲ

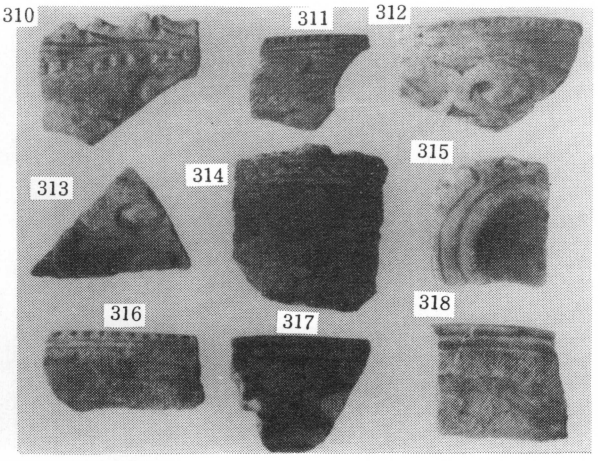


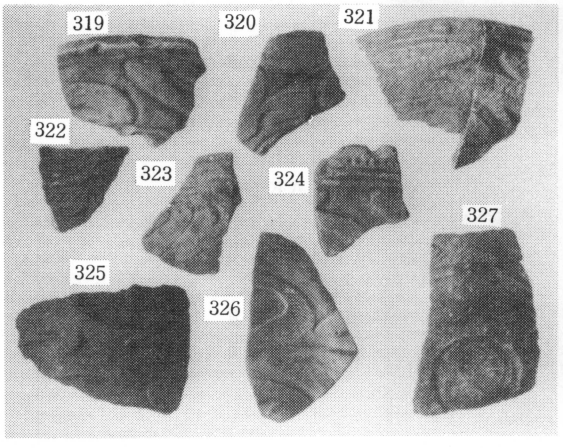
〔晩期の土器〕第６群土器－309　（粗製）

☆　（309）は、ＡＫ２Ⅲ出土の「大洞Ｃ１式」浅鉢形土器である。

- この（309）は、器形が不整で、口縁が小波状を呈する。底面は不整な上げ底を呈する。（手づくね成形）
- 施文はなく、器表面、内面とも整形が悪いもので、凸凹がある。
- 色調は、外面灰黒色一部黄土色、内面粘土貼付を認める。内面は黄褐色である。胎土・焼成とも不良である。

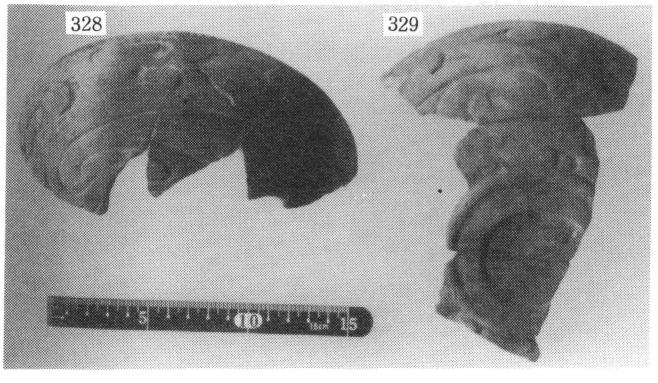
310 ＡＬ１Ⅲ
311 ＡＬ１Ⅲ
312 ＡＮ１ｂ－Ｂ１Ⅲ
313 ＡＮ１ｂ－Ｂ１Ⅱ
314 ＡＫ２Ⅲ
315 ＡＮ１ｂ－Ｂ１Ⅱ
316 ＡＮ１ｂ－Ａ２Ⅱ
317 ＡＮ１ｂ－Ｂ１Ⅱ
318 ＡＮ１ｂ－Ｂ１Ⅱ



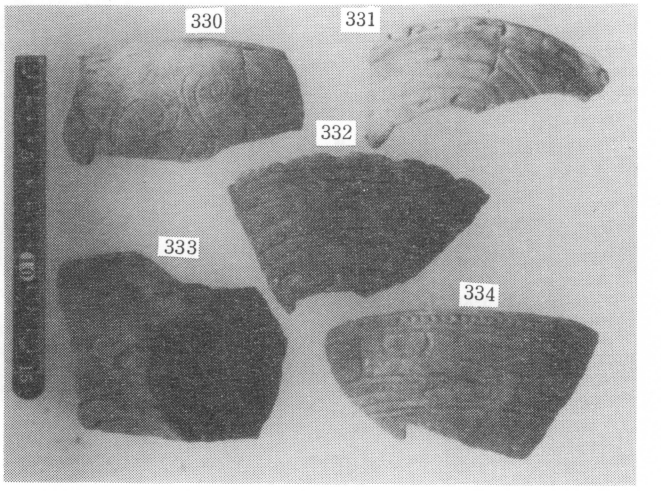


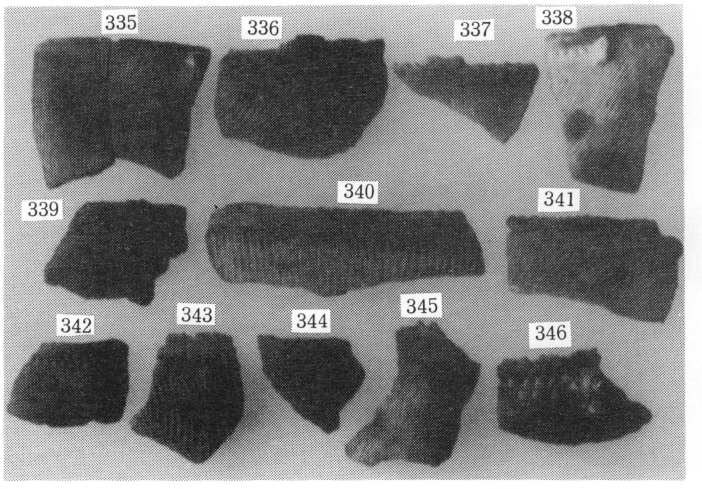
319 ＡＫ２Ⅱ
320 ＡＮ１ｂ－Ｂ１Ⅱ
321 ＡＮ１ｂ－Ｂ１Ⅱ
322 ＡＮ１ｂ－Ｂ１Ⅱ
323 ＡＫ２Ⅲ
324 ＡＫ２Ⅱ
325 ＡＫ２Ⅲ
326 ＡＮ１ｂ－Ａ２Ⅱ
327 ＡＮ１ｂ－Ｂ１Ⅱ

328 ＡＫ１Ⅱ
329 ＡＫ２Ⅲ



330 ＡＫ１Ⅱ
331 ＡＬ１Ⅱ
332 ＡＫ２Ⅲ
333 ＡＫ２Ⅱ
334 ＡＫ２Ⅲ



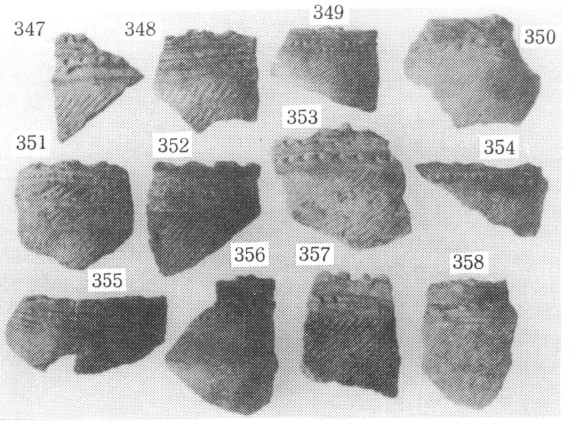


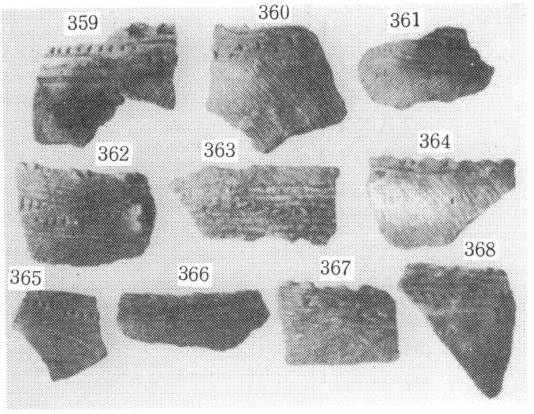
335 ＡＮ１ｂ－Ｂ１Ⅱ
336 ＡＫ２Ⅱ
337 ＡＫ２Ⅲ
338 ＡＫ２Ⅲ
339 ＡＮ１ｂ－Ｂ１Ⅱ
340 ＡＬ１Ⅲ
341 ＡＫ２Ⅲ
342 ＡＮ１ｂ－Ｂ１Ⅱ
343 ＡＮ１ｂ－Ｂ１Ⅱ
344 表採
345 ＡＫ２Ⅲ
346 ＡＫ２Ⅲ

〔晩期の土器〕－（330～334）は精製土器、（335～346）は粗製土器である。

- （330）は、大洞ＢＣ式の可能性も否定できない。（332）は注口土器片（330・331・333・334）は皿形、（335～346）は、鉢形～深鉢形土器と思われる。
- いずれも第６群とした「大洞Ｃ１式」土器である。

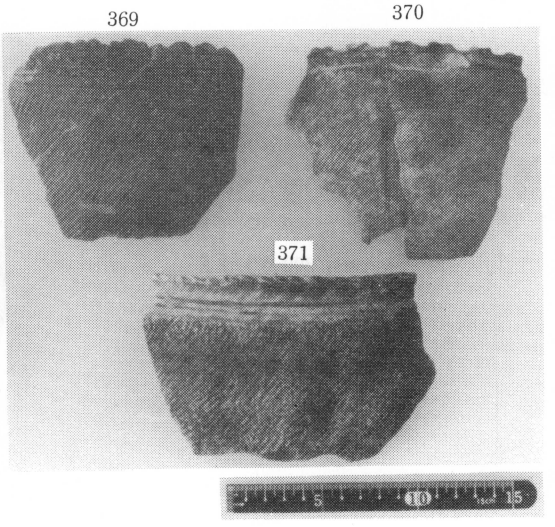
347 ＡＮ１ｂ－Ａ２Ⅱ
348 ＡＮ１ｂ－Ｂ１Ⅱ
349 ＡＮ１ｂ－Ｂ１Ⅱ
350 ＡＫ２Ⅲ
351 ＡＫ２Ⅲ
352 ＡＮ１ｂ－Ｂ１Ⅱ
353 ＡＮ１ｂ－Ｂ１Ⅱ
354 ＡＫ２Ⅲ
355 ＡＫ２Ⅲ
356 ＡＮ１ｂ－Ｂ１Ⅲ



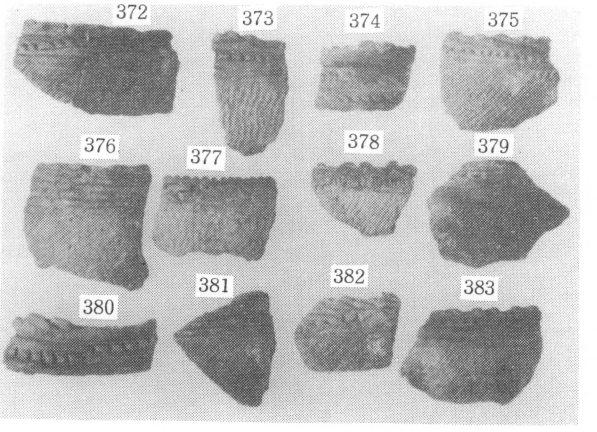


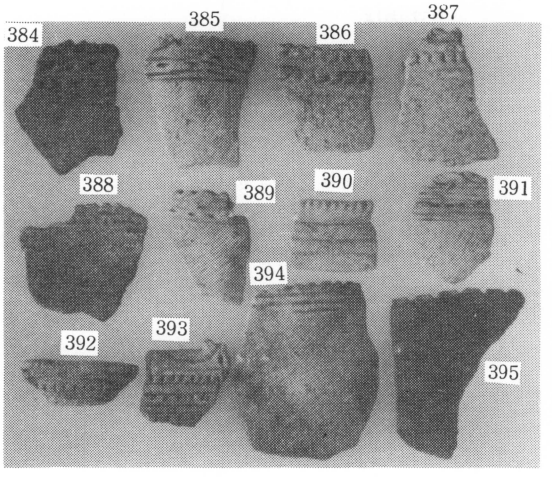
357 表採
358 ＡＬ１Ⅲ
359 ＡＫ２Ⅲ
360 ＡＮ１ｂ－Ａ２Ⅱ
361 ＡＮ１ｂ－Ａ２Ⅲ
362 ＡＬ１Ⅲ
363 ＡＮ１ｂ－Ａ２Ⅱ
364 ＡＫ２Ⅲ
365 ＡＫ２Ⅲ
366 ＡＫ２Ⅲ
367 ＡＫ２Ⅲ
368 ＡＫ１Ⅱ

369 ＡＫ２Ⅲ
370 ＡＫ２Ⅲ
371 ＡＫ２Ⅲ



372 ＡＮ１ｂ－Ｂ１Ⅱ
373 ＡＮ１ｂ－Ｂ１Ⅱ
374 ＡＬ２Ⅲ
375 ＡＫ２Ⅲ
376 ＡＫ２Ⅲ
377 ＡＮ１ｂ－Ａ２Ⅱ
378 ＡＫ２Ⅲ
379 ＡＫ２Ⅲ
380 ＡＫ２Ⅱ
381 ＡＫ２Ⅲ
382 ＡＮ１ｂ－Ａ２Ⅱ
383 ＡＫ２Ⅲ



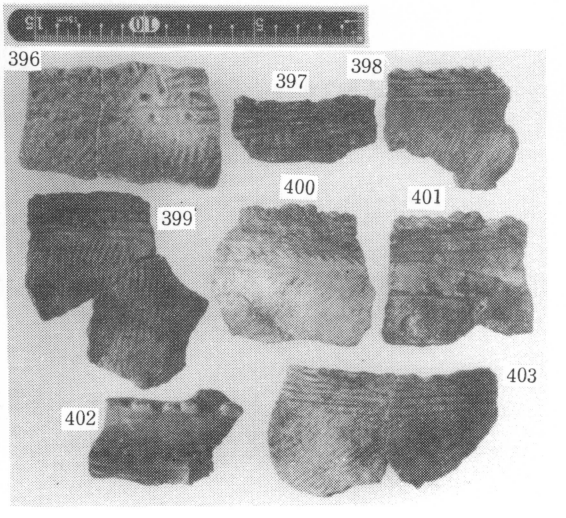


384 ＡＬ１Ⅲ
385 ＡＬ１Ⅲ
386 ＡＬ１Ⅲ
387 ＡＫ２Ⅲ
388 ＡＬ１Ⅲ
389 ＡＬ１Ⅲ
390 ＡＫ２Ⅲ
391 ＡＬ１Ⅲ
392 ＡＮ１ｂ－Ａ２Ⅱ
393 ＡＮ１ｂ－Ｂ１Ⅱ
394 ＡＫ２Ⅲ
395 ＡＫ２Ⅲ

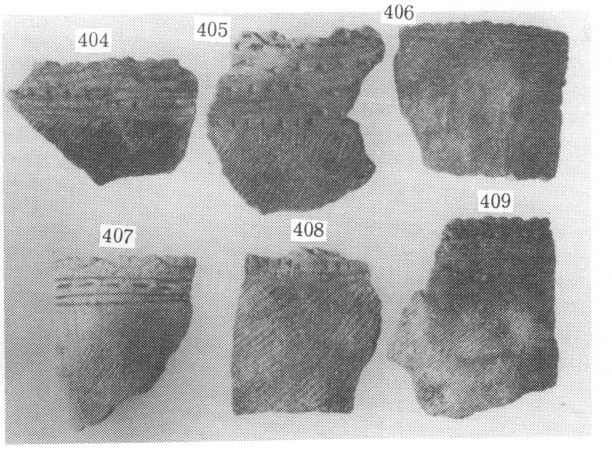
☆（390・393・401・402）は精製・他は粗製土器である。

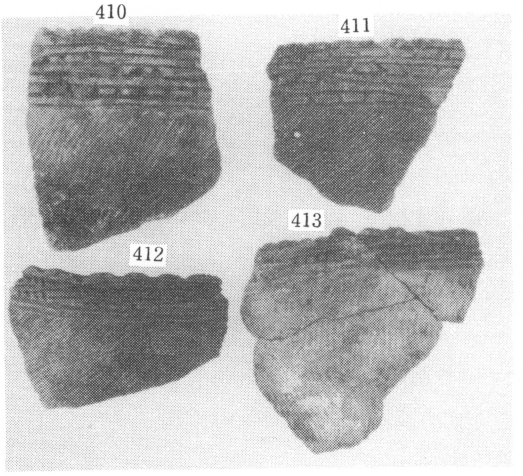
・　器形は、鉢～深鉢形土器であろう。

396 ＡＫ２Ⅲ
397 ＡＫ２Ⅲ
398 ＡＫ２Ⅲ
399 ＡＮ１ｂ－Ｂ１Ⅱ
300 ＡＬ１Ⅲ
301 ＡＫ２Ⅲ
302 ＡＫ２Ⅲ
303 ＡＫ２Ⅲ



404 ＡＫ２Ⅲ
405 ＡＮ１ｂ－Ｂ１Ⅱ
406 ＡＫ２Ⅲ
407 ＡＬ１Ⅲ
408 ＡＫ２Ⅲ
409 ＡＫ２Ⅲ

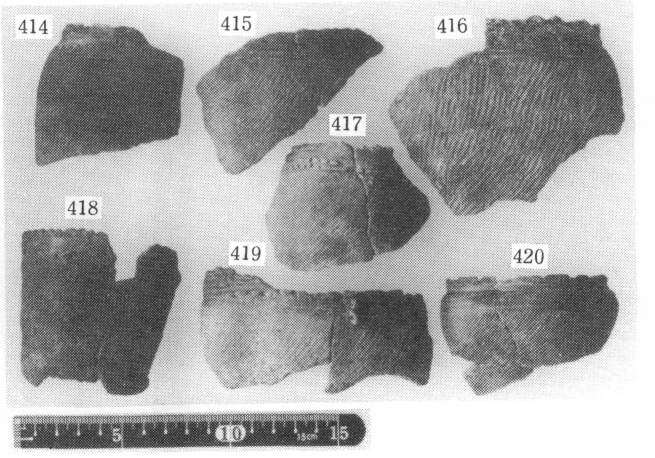




410 ＡＫ２Ⅲ
411 ＡＫ２Ⅲ
412 ＡＫ２Ⅲ
413 ＡＮ１ｂ－Ｂ１Ⅱ

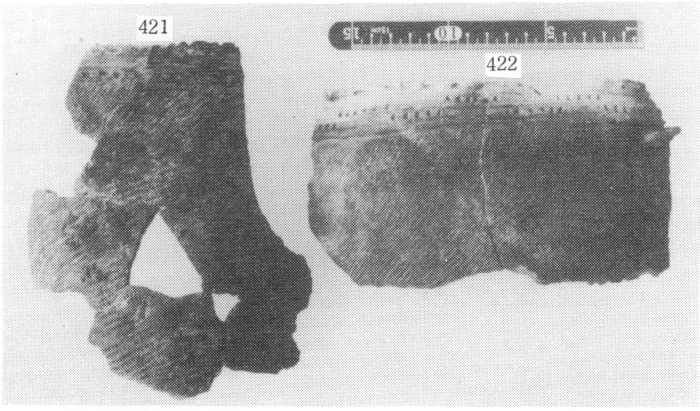
☆（404～420）は、いずれも粗製土器で器形は、鉢～深鉢形土器である。

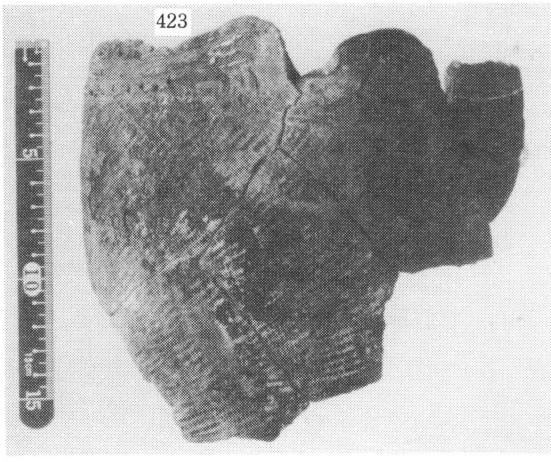
414 ＡＮ１ｂ－Ｂ１Ⅱ
415 ＡＫ２
416 ＡＫ２
417 ＡＮ１ｂ－Ｂ１Ⅱ
418 ＡＫ２
419 ＡＬ１
420 ＡＮ１ｂ－Ｂ１Ⅱ



421 ＡＬ１Ⅱ

422 ＡＫ２Ⅲ





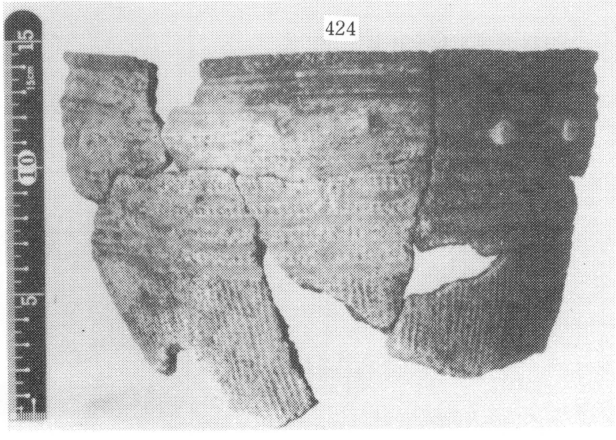
423 ＡＫ２Ⅱ

☆（422・423）は、やゝ大形の深鉢形土器で粗製である。

両者は、第６群土器「大洞Ｃ１式」である。

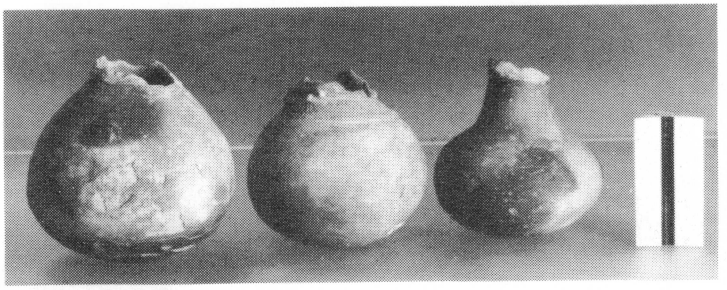
第９群　424 ＡＫ２Ⅱ

☆（424）は、第９群とした「大洞Ａ式」深鉢形粗製土器である。

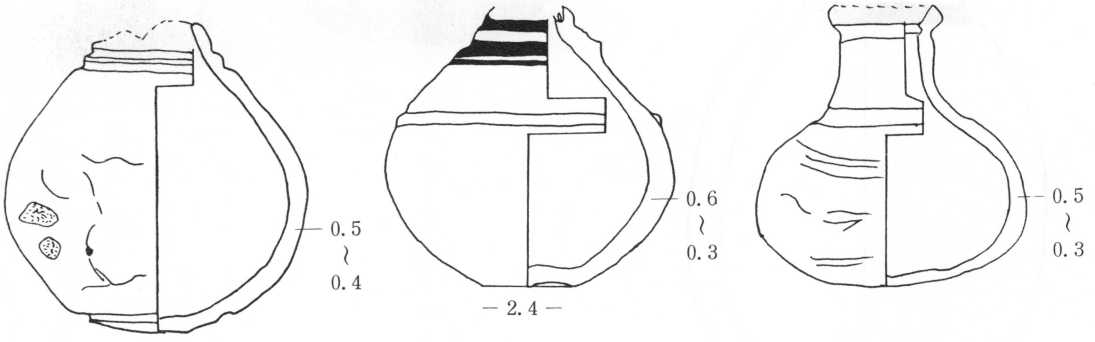


〔晩期の土器〕第７群土器（壺形）　P・P・L 52

425　426　427



ＡＫ２Ⅲ　ＡＫ２Ⅲ中　ＡＮ１ｂ－Ｂ１Ⅱ

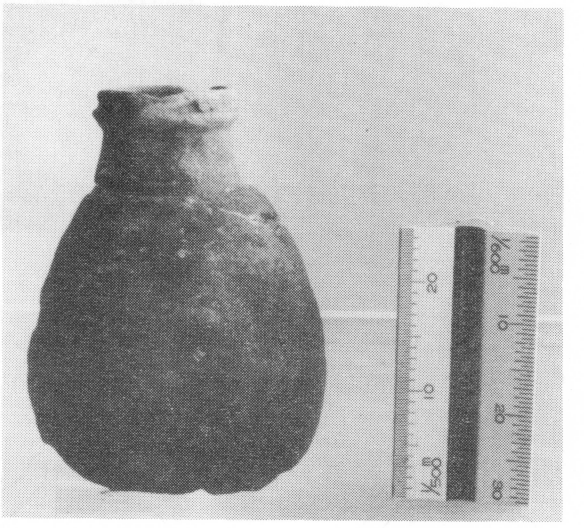


〔晩期の土器〕第７群土器－425・426・427（精製）

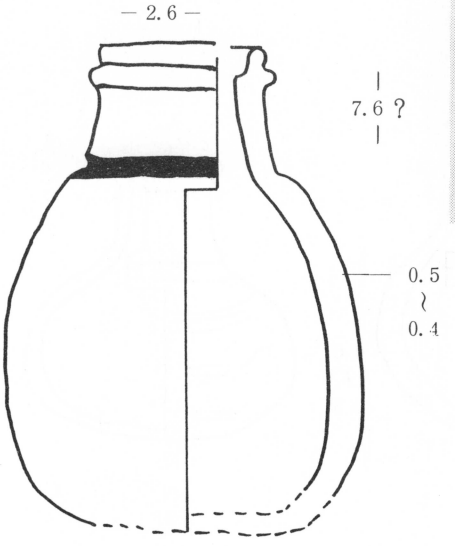
☆　ここに掲げた（425～427）は、ＡＫ２Ⅲ、ＡＮ１ｂ－Ｂ１Ⅱ出土の「大洞Ｃ２式」壺形土器である。

- 器形は、（425・426）は、この期の特徴を示す洋梨状をなすもので、（427）は、胴下位に最大幅をもつもので、やはりこの期の一タイプをなすものである。また底面は（425・427）は丸底、（426）は上げ底をなすものである。
- 施文は、沈線文がそれぞれ頸部～肩部、および胴部下に施文される。（452）は底部直上に施文される。
- 色調は、（425）は内外とも黒色、（426）は内外とも灰黒色なるも朱ぬり痕を認める。（427）は外面黒色、一部黄褐色、内面灰黒色を呈する。３ことも胎土・焼成は良い。

428



AK２Ⅲ

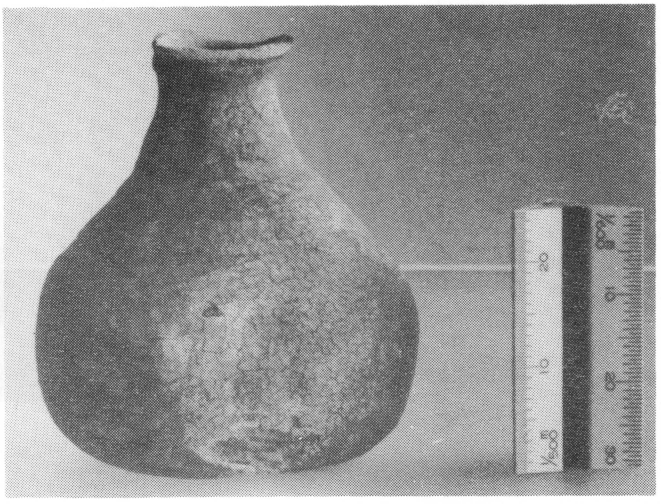


〔晩期の土器〕第７群土器－428　（精製）

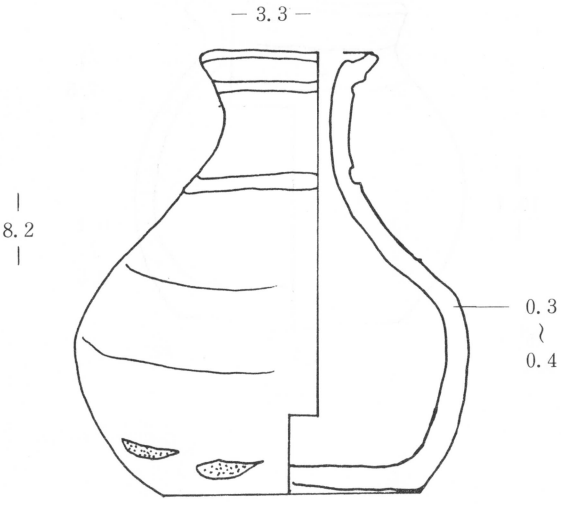
☆　（428）は、AK２Ⅲ出土の「大洞C２式」壺形土器である。

- 器形は、洋梨状を呈するもので、平縁のものであるが、現存約$\frac{1}{2}$弱のもので底部は不明である。
- 施文は、口縁直下に隆帯をめぐらし、肩部には、沈線文が１条めぐり、胴部は無文で研磨されたものである。
- 色調は、外面黒褐色、内面灰黒色を呈する。胎土・焼成とも最良である。

429



ＡＫ２Ⅲ

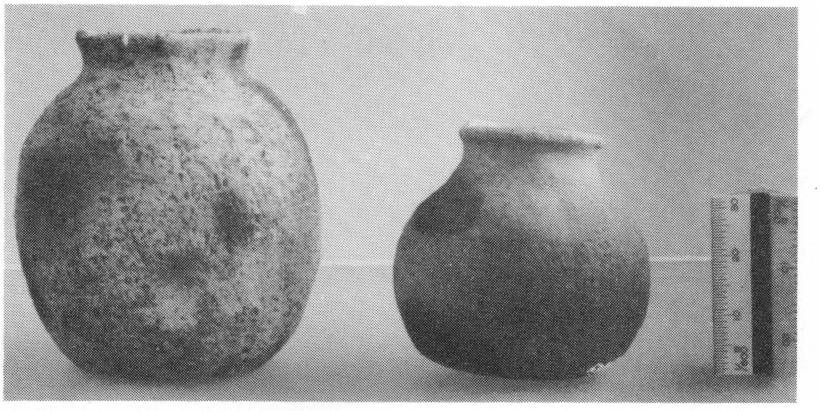


〔晩期の土器〕第７群土器－429　（粗製）

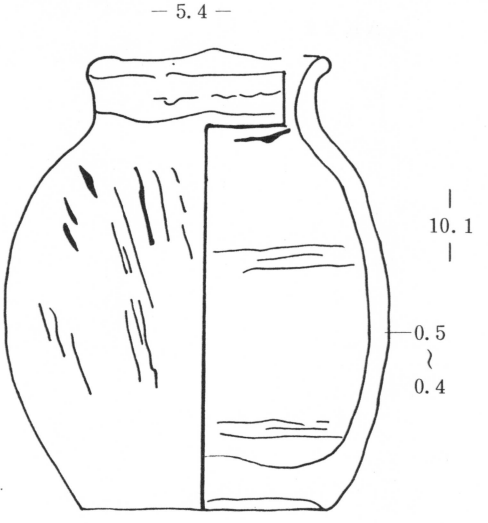
☆　このものは、ＡＫ２Ⅲ出土の「大洞Ｃ２式」壺形土器である。

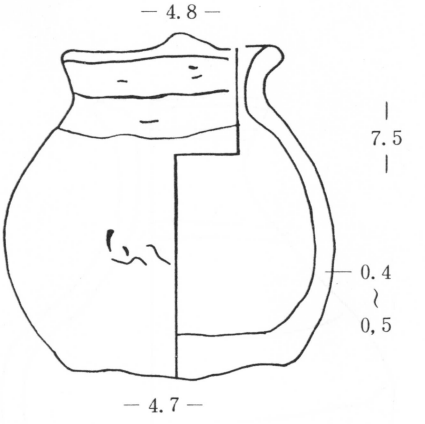
- 器形は、末広がりの頸部をもち、胴中央下に最大幅を有する器形で、やはりこの期の一タイプと認められるものであろう。なお底面はわずかに上げ底である。
- 施文は、頸部、肩部に各１条の沈線文が施文されるが他は無文である。
- 色調は、器内外とも灰褐色で、胎土・焼成とも良い。また一部に朱ぬり痕が認められる。

430　　431



ＡＫ２Ⅲ　　ＡＮ１ｂ－Ｂ１Ⅱ



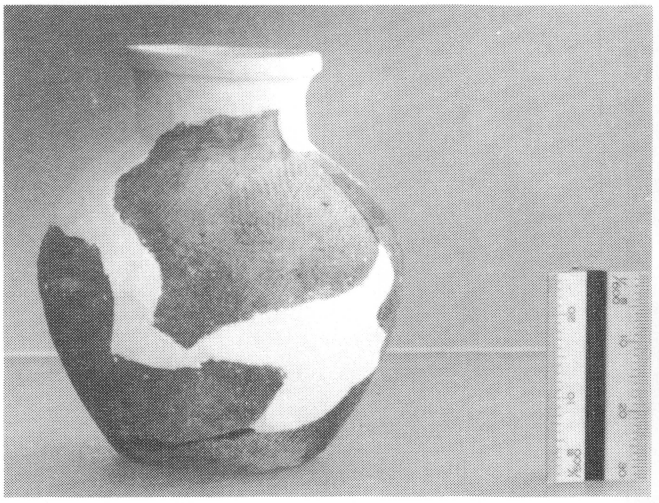


〔晩期の土器〕第７群土器－ 430 ・ 431　（粗製）

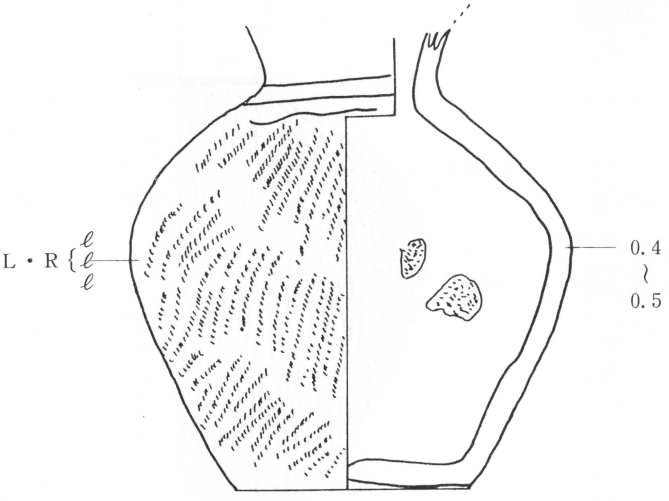
☆　ここに示した（430 ・ 431）は、それぞれＡＫ２Ⅲ、ＡＮ１ｂ－Ｂ１Ⅱ出土の「大洞Ｃ２式」壺形土器である。

- 両者とも口縁は平縁で頸部はせまく胴部がふくらむ器形である。また底面は、（430）は上げ底・（431）は不整であるが一部剥離している。
- 色調は、（430）は灰黒色、（431）は灰白色を呈する。胎土・焼成は前者は悪く、後者は最良である。

432



ＡＫ２Ⅲ



－4.8－

〔晩期の土器〕第７群土器－432　（粗製）

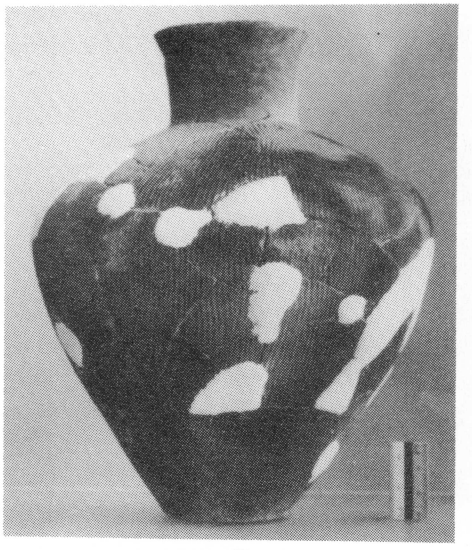
☆　（432）は、ＡＫ２Ⅲ出土の「大洞Ｃ２式」壺形土器である。

- 欠失しているため、口縁は不明であるが、復原写真のようになると思われる。

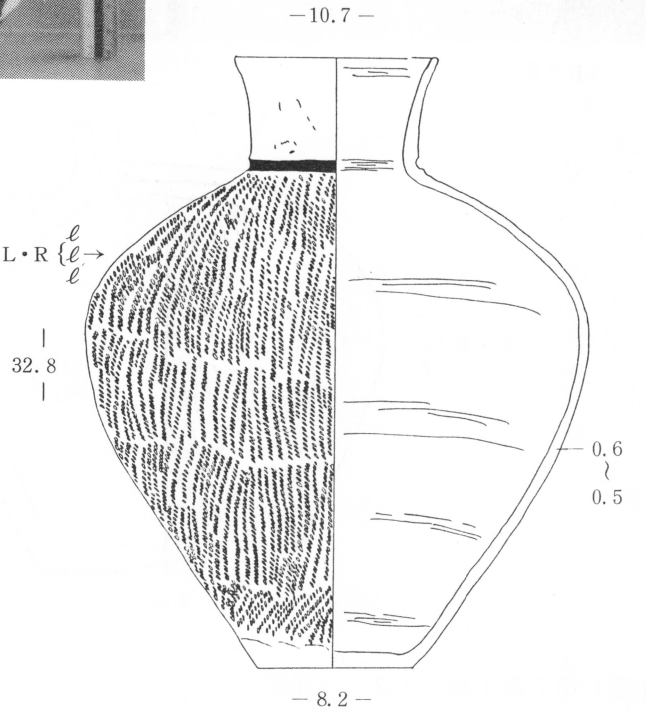
　すなわち、口頸部は外反し、口縁は肥厚するものであろう。肩部が張らず最大幅は、ほぼ胴中央にある器形で底面は、わずかに上げ気味のものである。

- 施文は、肩部に沈線文が１条、胴部には、０段多条のＬ・Ｒ縄文が左下がりに施文される。
- 色調は、外面黄褐色、一部黒色、内面黄褐色を呈し、胎土・焼成は良い。

433



ＡＫ２Ⅲ



〔晩期の土器〕第７群土器ー433　（粗製）

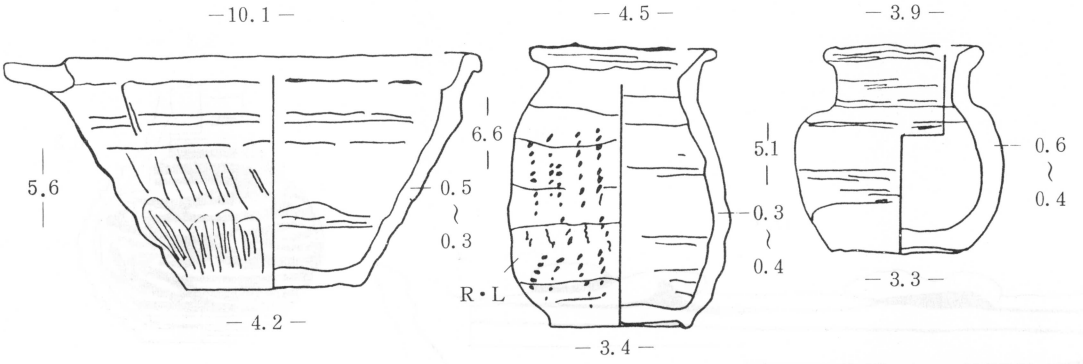
☆　（433）は、ＡＫ２Ⅲ出土の「大洞Ｃ２式」大形壺形土器である。

- このものは、口頸部が直立に近く、肩部が張らず最大幅は中央より上部にある器形で底面は平底である。
- 施文は、肩部に１条の沈線文があり、胴部には縄文が密に施文されるものである。
- 色調は、外面灰褐色、内面黄褐色を呈し、胎土・焼成とも良い。

〔晩期の土器〕第７群土器（片口鉢、壺形）　　P・P・L 58

434　435　436

AK２Ⅲ　AK２Ⅲ　AN１b－B１Ⅱ

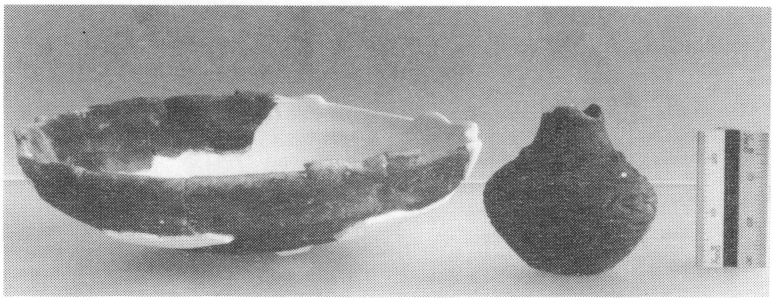


〔晩期の土器〕第７群土器－434・435・436　（粗製）

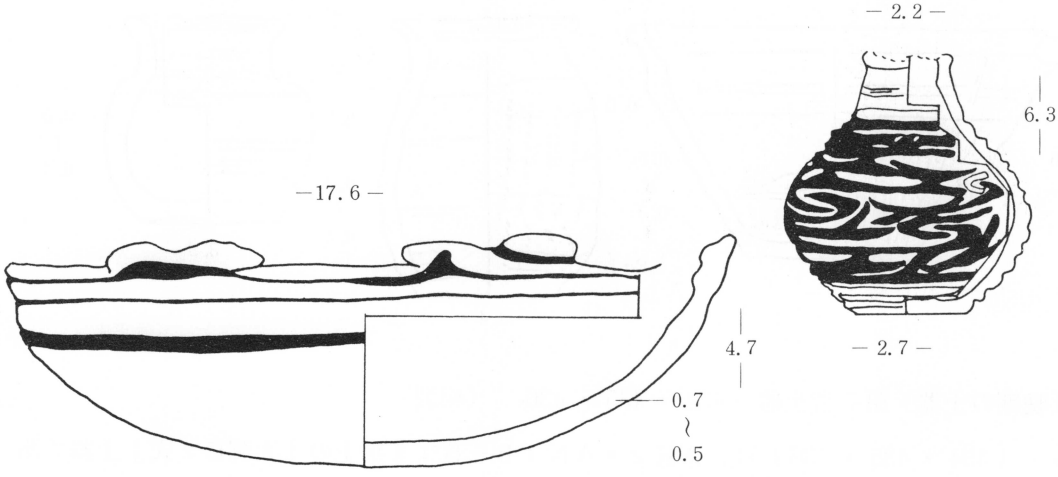
☆　（434・435・436）は、AK２・AN１b－B１Ⅱ出土の「大洞C２式」土器である。なお（434）は片口付鉢形、（435・436）は小形壺である。

- 器形は、（434）は、口頸部が外反し肩部が張るこの期のノーマルな器形の鉢形に、片口が付いたもので、（435・436）は、小形壺のそれぞれ一タイプをなす器形である。すなわち、（435）は長胴、（436）は肩部の張る短い胴部をもつタイプである。
- 施文は、（434）は無文であるがケズリ状の整形痕がある。（435）は、R・Lの縄文があり、（436）は横方向の整形痕があるが無文である。
- 色調は、（434）は灰黒色、（435）は赤褐色、（436）は赤褐色を呈する。胎土・焼成は良いが、（435）はやや悪い。

437　　438 ↙第８群土器



ＡＫ２Ⅲ　　ＡＫ２Ⅲ

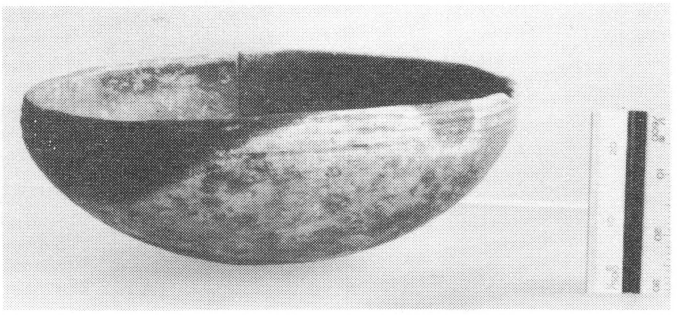


〔晩期の土器〕第７・８群土器－437・438　（精製）

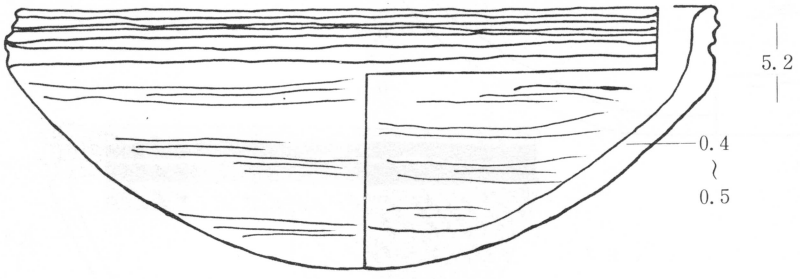
☆　（437）は、ＡＫ２Ⅲ出土の「大洞Ｃ２式」皿形土器、（438）は、ＡＫ２Ⅲ出土の「大洞Ｃ２－Ａ式」→（仮称）壺形土器である。

- （437）は、２こ１対の突起を４対付すもので平縁である。口頸部は、やや外反するが肩部がふくらむ器形で丸底である。
- （438）は、第８群土器として分類したもので、器形は洋梨状を呈するもので底面は平底である。
- 色調は、（437）は朱ぬり土器で外面灰黒色一部黄褐色、内面灰黒色を呈する。（438）は、やはり朱ぬり土器で、内・外とも灰赤色を呈する。両者とも胎土・焼成は最良であある。

439



ＡＬ１Ⅲ



〔晩期の土器〕第７群土器－439　（精製）

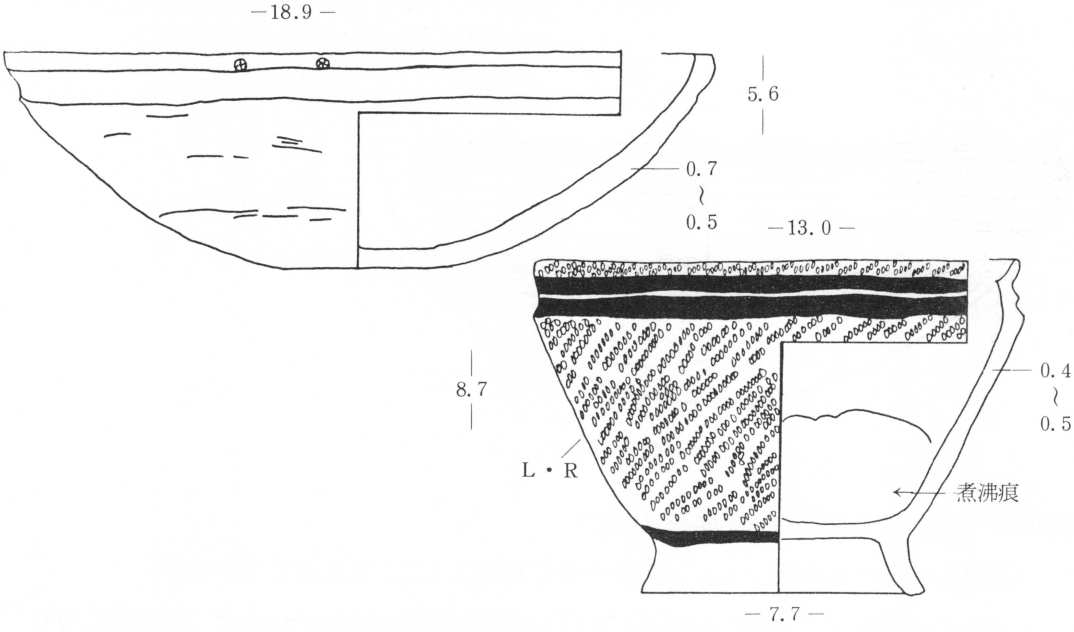
☆　（439）としたものは、ＡＬ１Ⅲ出土の「大洞Ｃ２式」皿形土器である。

- このものの器形は、口頸部がゆるく外反し、肩部が張る器形で胴部は、丸味をもつもので底面は丸底のものである。
- 施文は、頸部に３条の沈線文をめぐらせるもので、肩部下は無文研磨されたものである。
- 色調は、外面赤褐色、一部黒色、内面黒色、一部赤褐色を呈し、朱ぬり痕を認めるものである。胎土・焼成とも最良である。

〔晩期の土器〕第７群土器（皿・台付鉢形）　　P・P・L 61

440　　441

ＡＫ２Ⅲ　　ＡＫ１Ⅲ

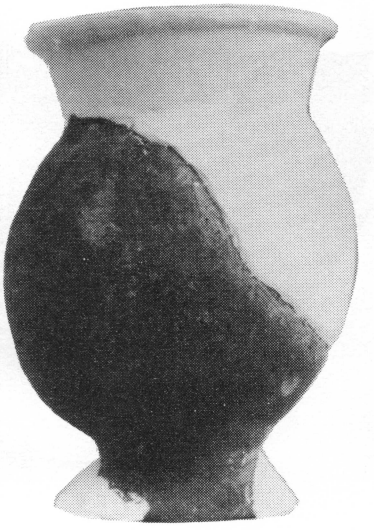


〔晩期の土器〕第７群土器－440・441　（精製・粗製）

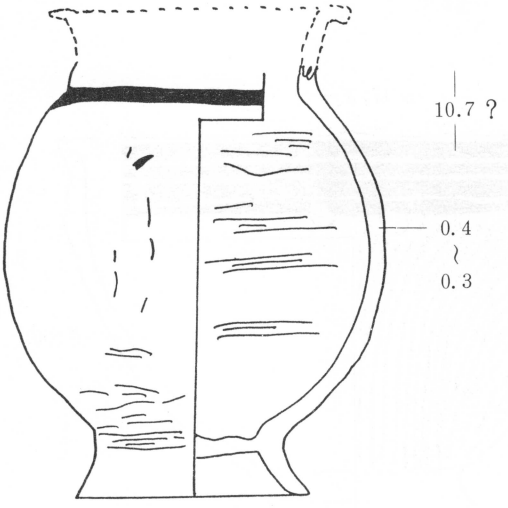
☆　（440）はＡＫ２Ⅲ、（441）はＡＫ１Ⅲ出土の皿形、台付鉢形土器で両者とも「大洞Ｃ２式」土器である。

- 器形は、（440）は、平縁でわずかに肩部が張り気味のもので中形の皿としては浅い器形である。（441）は、口頸部が外反し肩部が張る器形で鉢としては、やや寸づまりのものである。
- 施文は、（440）には太い沈線文があるが、胴部は無文で研磨されている。（441）は、頸部に２条の沈線があり、胴部下端にも１条めぐる。胴部には二段単節Ｌ・Ｒ縄文が施文される。
- 色調は、（440）は暗褐色を呈し、朱ぬり痕がある。（441）は、鉢部黒色、台部赤褐色を呈する。胎土・焼成は両者とも良い。

442



ＡＫ２Ⅲ



－5.1－

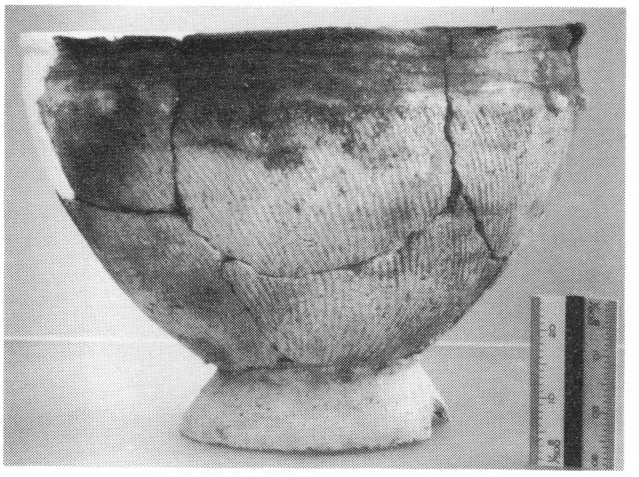
〔晩期の土器〕第７群土器－442　（精製）

☆　（442）は、ＡＫ２Ⅲ出土の「大洞Ｃ２式」台付壺形土器である。

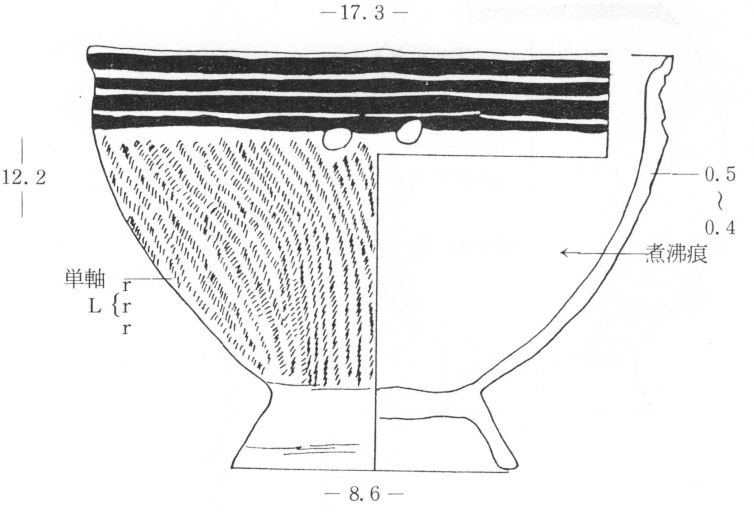
- 器形は、口頸部が欠失しているが、壺形土器に台部の付くものは珍しいものである。
- 施文は、肩部に１条の沈線文の他は無文であるが、器面は研磨され平滑面をなすものである。
- 色調は、外面灰黒色を呈し、内面は灰褐色をなす。胎土・焼成とも最良なものである。

☆　この土器を一応「大洞Ｃ２式」としたが類似を待って、さらに考えたい。

443



ＡＫ２Ⅲ

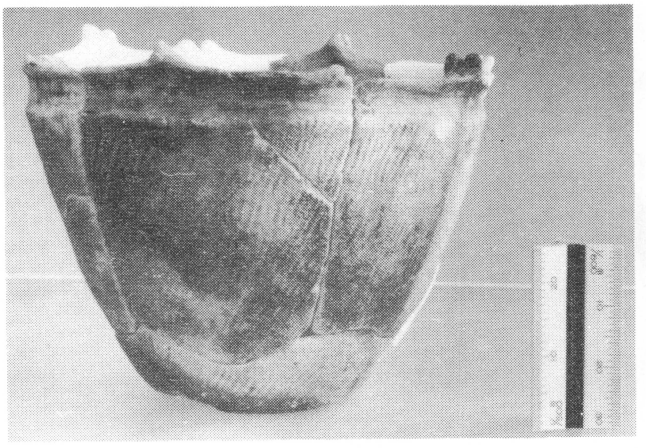


〔晩期の土器〕第７群土器－ 443　（粗製）

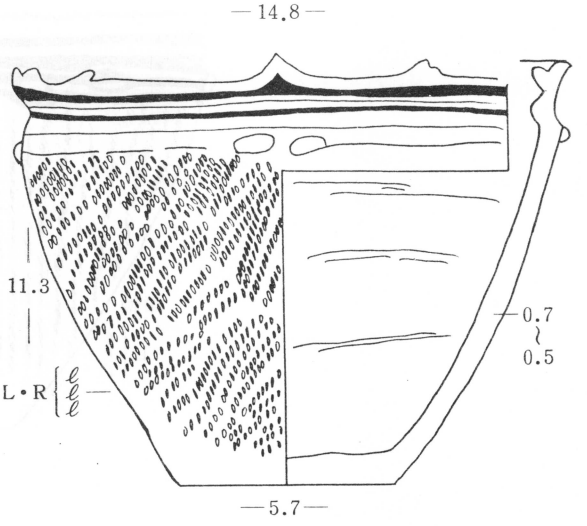
☆　（443）は、ＡＫ２Ⅲ出土の「大洞Ｃ２式」台付鉢形土器である。

- このものの器形は、口頸部が外反し、肩部が丸味をもってふくらむ器形で、鉢部が丸味をもっている特徴がある。
- 施文は、口頸部に４条の沈線文がめぐり、２こ１対の粘土粒が４対付くもので胴部には、単軸撚糸文（L { r r r）が密に施文されるが台部は無文である。
- 色調は、外面黒褐色、内面黒色を呈し、煮沸痕がある。胎土・焼成とも良い。

444



ＡＮ１ｂ－Ｂ１Ⅱ

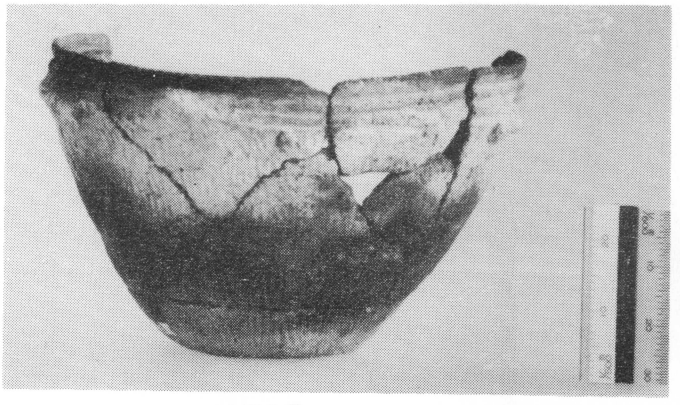


〔晩期の土器〕第７群土器－444　（半精製）

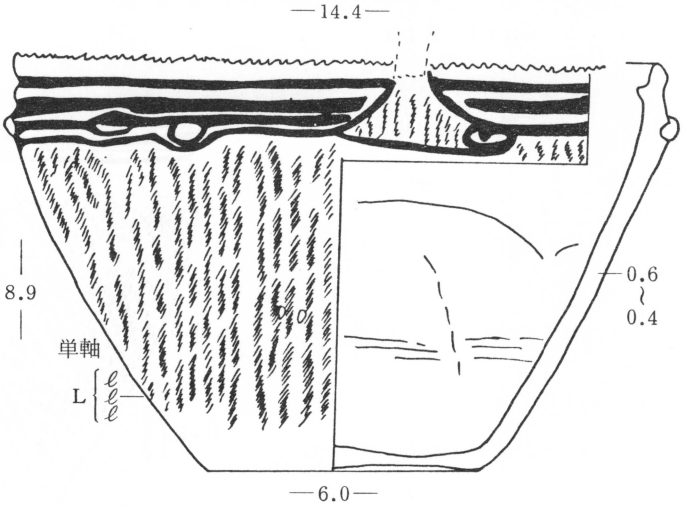
☆　（444）はＡＮ１ｂ－Ｂ１Ⅱ出土の「大洞Ｃ２式」鉢形土器である。

- このものの器形は、口縁が波状口縁で、４この山型突起と、その中間に４この小突起が付けられるものである。また、口頸部が外反し、肩部が張る器形で底面は平底である。
- 施文は、頸部に２条の沈線がめぐり、肩部には２こ１対の粘土粒が付けられ、胴部には、Ｌ・Ｒ縄文が左下がりに斜行する。
- 色調は、外面赤褐色一部黒色、内面赤褐色で煮沸痕を認める。胎土・焼成は良い。

445



ＡＫ２Ⅲ



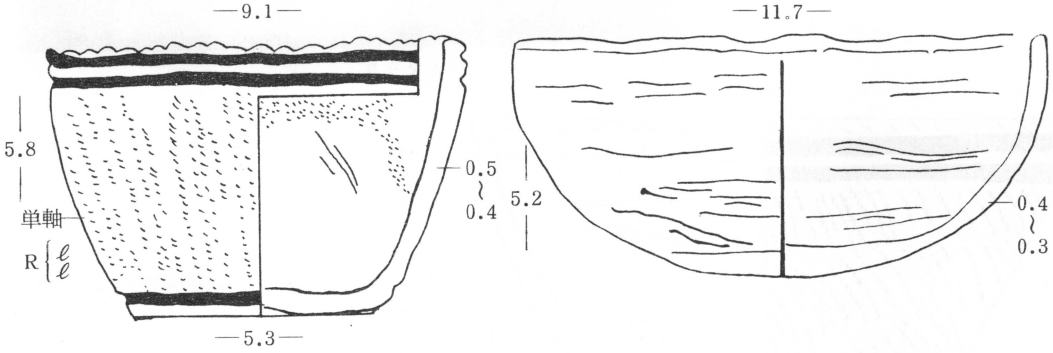
〔晩期の土器〕第７群土器－445　（粗製）

☆　（445）は、ＡＫ２Ⅲ出土の「大洞Ｃ２式」鉢形土器である。このものには、１この把手があったものらしいが欠失している。

- 器形は、口縁が刻目をもち、小波状を呈する。頸部は外反し肩部が張るもので底面は上げ底である。
- 施文は、頸部に３条の沈線文があり、肩部のものは、粘土粒の間をめぐっているが粘土粒は２こ１対ずつ４対付くものらしいが欠失している。胴部には、単軸撚糸文が縦位に施文される。
- 色調は、外面上半赤褐色、下半黒色、内面上半黒色、下半赤褐色を呈する。胎土・焼成はやや良い。

446　　447

ＡＮ１ｂ－Ｂ１Ⅱ　　ＡＫ１Ⅱ

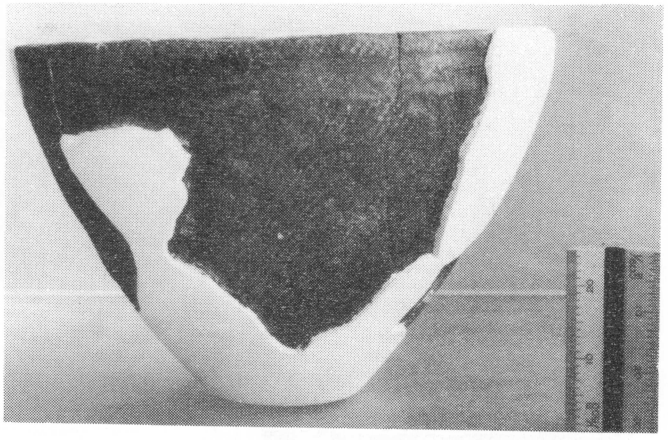


〔晩期の土器〕第７群土器－446・447　（粗製・精製）

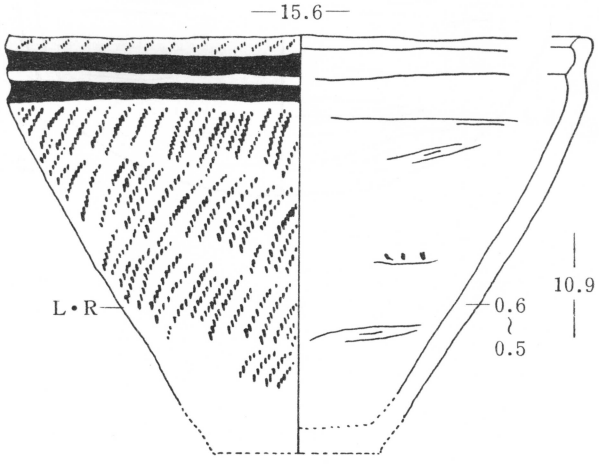
☆　（446・447）は、ＡＮ１ｂ－Ｂ１Ⅱ、ＡＫ１Ⅱ出土の「大洞Ｃ２式」小形鉢形、椀形土器である。

- （446）の器形は、口縁が小波状を呈し、頚部が外反気味で、肩部もわずかに張る器形である。底面もまた中央部が上げ底である。（447）は、平縁で、口縁はやや不整であるが、分類は皿形としたが椀形に近い器形である。
- 施文は、（446）は、頚部に２条の沈線文があり、また底部直上にも１条の沈線文が施文される。胴部には、単軸撚糸文がある。（447）は、無文で器表面が平滑面をなしている。
- 色調は、（446）は内外とも褐色～黒色、（447）は、内外とも灰黄褐色を呈し、胎土・焼成は（446）はやや不良、（447）は良い。

448



ＡＫ２Ⅲ

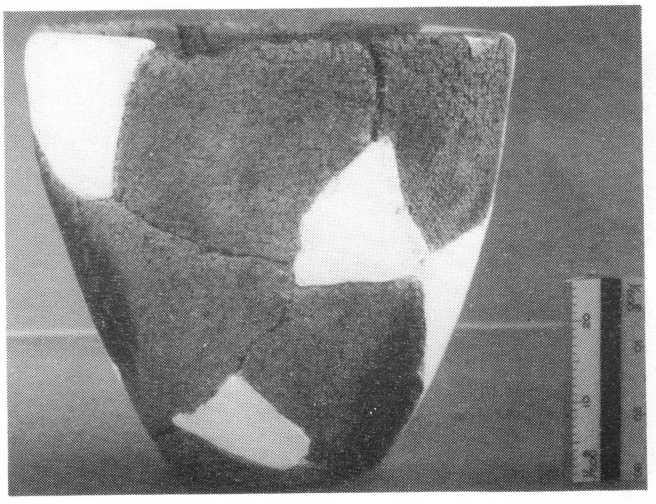


〔晩期の土器〕第７群土器－448　（粗製）

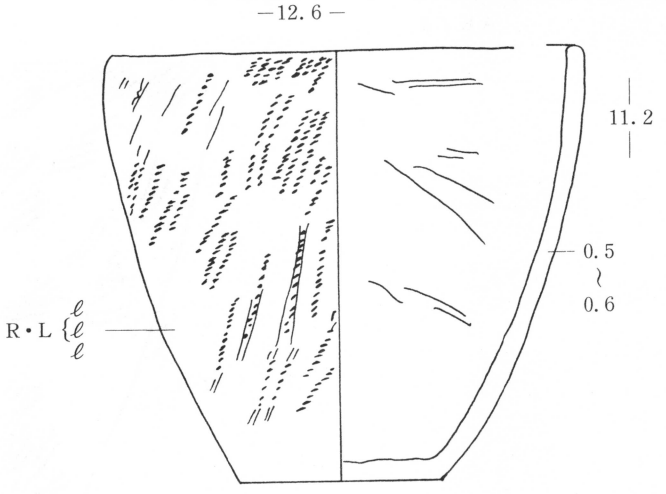
☆　（448）は、ＡＫ２Ⅲ出土の「大洞Ｃ２式」鉢形土器である。

- このものの器形は、平縁で頸部は外反するもので肩部はやや張る器形である。
- 施文は、頸部に２条の沈線文をめぐらせ、胴部には２段単節縄文が施文されている。
- 色調は、内外とも黒色で、胎土・焼成は良好である。

449



ＡＬ１Ⅲ

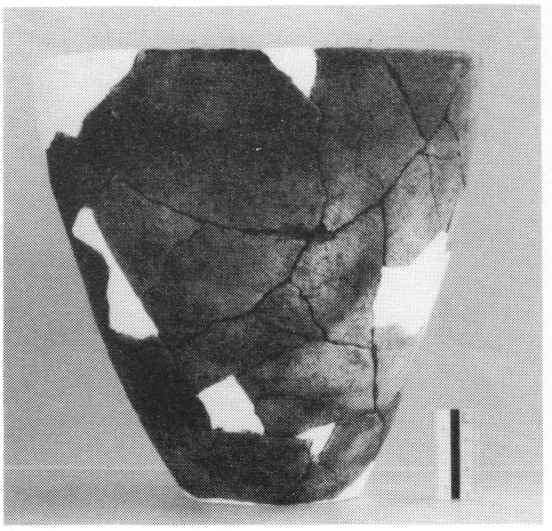


〔晩期の土器〕第７群土器－449　（粗製）

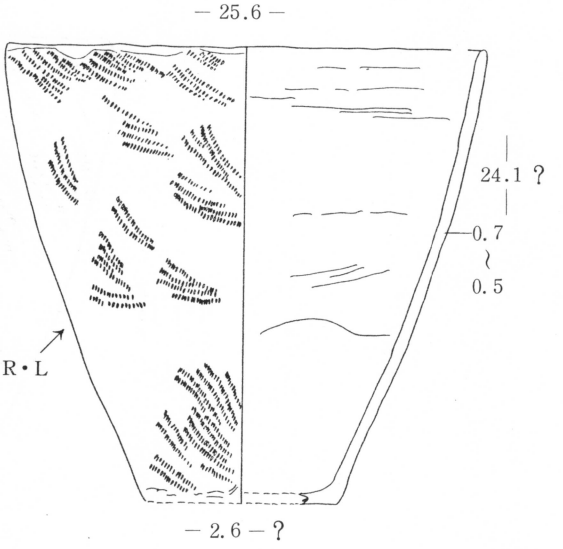
☆　（449）は、ＡＬ１Ⅲ出土の「大洞Ｃ２式」鉢形土器である。

- このものの器形は、平縁で、口頸部は内傾する器形で、底面は平底を呈する。
- 施文は、一部消えているが左下がりに斜行する縄文が施文されるものである。
- 色調は、外面灰黄褐色、一部黒色、内面黄褐色を呈し、胎土、焼成ともやや悪い。

450



ＡＫ２Ⅱ

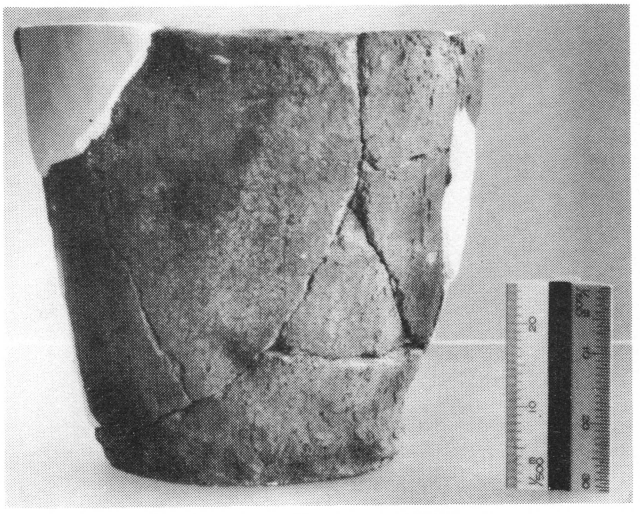


〔晩期の土器〕第７群土器－450　（粗製）

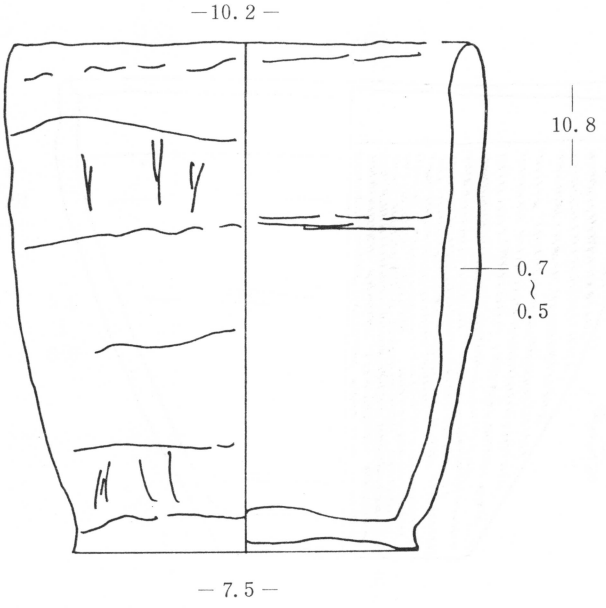
☆　（450）は、ＡＫ２Ⅱ出土の「大洞Ｃ２式」深鉢形土器である。

- このものの器形は、口頸部がわずかに内傾気味のもので、肩部が丸味のある器形で、底面は上げ底である。
- 施文は、口縁直下より右下りのＲ・Ｌ縄文が施文されるものであるが、風化のためか、部分的に観察される。
- 色調は、黒褐色で、内面も同様であるが一部黄褐色を呈する。胎土・焼成ともやや悪いもので、器表面はザラザラする。

451



ＡＫ２Ⅲ



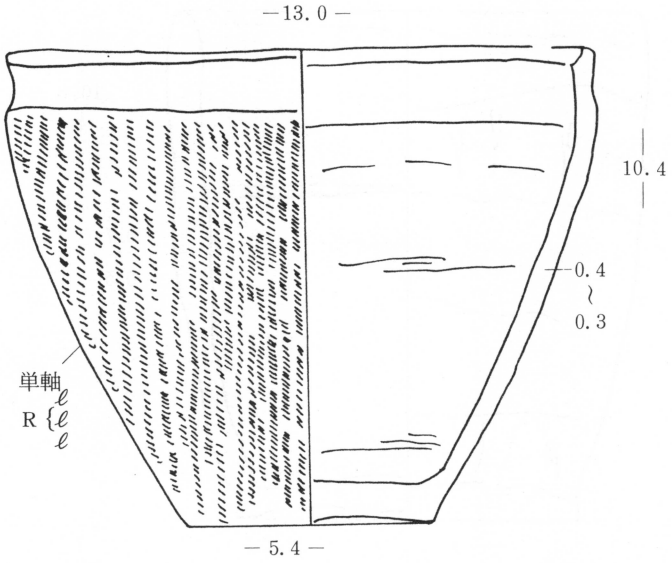
〔晩期の土器〕第７群土器－451　（粗製）

☆　（451）は、ＡＫ２Ⅲ出土の「大洞Ｃ２式」深鉢形土器である。

- このものの器形は、頸部がやや内傾するが、殆んど円筒形に近い器形のものである。わずかに底部直上がしぼまり、底面は上げ底である。
- 施文はなく、器表面に凹凸があって整形も粗末である。
- 色調は、内外とも黄褐色を呈する。胎土・焼成はやや良い。

452

ＡＫ２Ⅲ



〔晩期の土器〕第７群土器－452　（粗製）

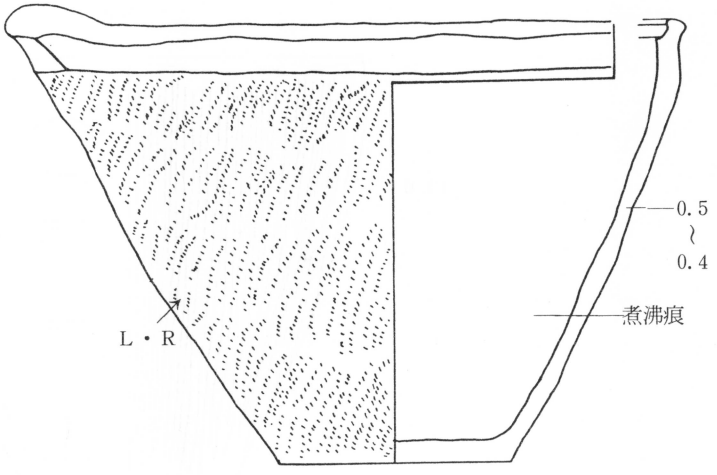
☆　（452）は、ＡＫ２Ⅲ出土の「大洞Ｃ２式」鉢形土器である。

- このものの器形は、口頸部が外反し、肩部がやや張る器形で底面は上げ底を呈する。
- 施文は、頸部に幅の広い無文帯をもち、胴部には、単軸撚糸文を施文するものである。
- 色調は、内外とも黒色を呈し、胎土・焼成とも最良のものである。

453

ＡＫ２Ⅱ

－18.1－



－16.1－

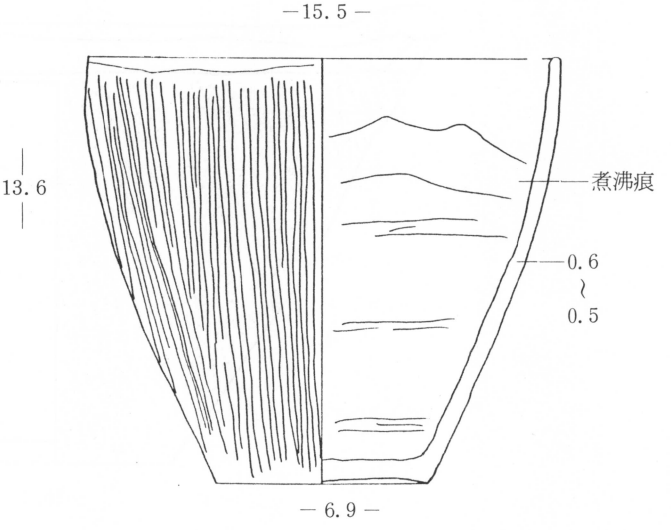
〔晩期の土器〕第７群土器－453　（粗製）

☆　（453）は、ＡＫ２Ⅲ出土の「大洞Ｃ２式」片口付鉢形土器である。

- 器形は、わずかに外反する頸部で、肩部の張りもゆるく平底である。
- 頸部には幅の広い無文帯をもち、胴部には、二段単節縄文が左下りに施文されるものである。
- 色調は、内外とも黒色、一部灰褐色で、胎土・焼成とも良いものである。

454

ＡＮ１ｂ－Ｂ１Ⅱ

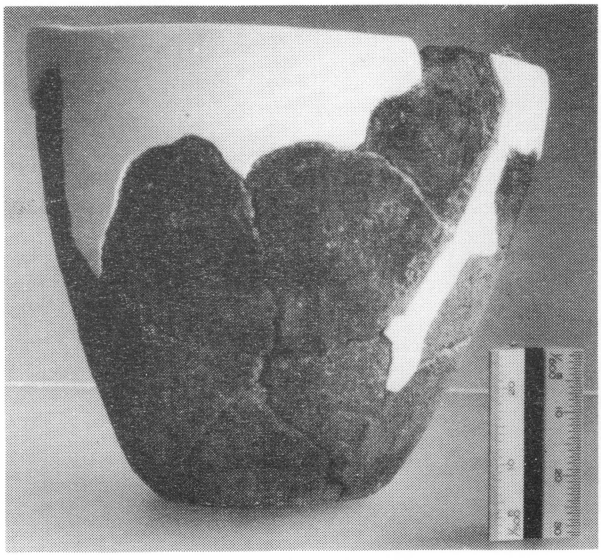


〔晩期の土器〕第７群土器－ 454　（粗製）

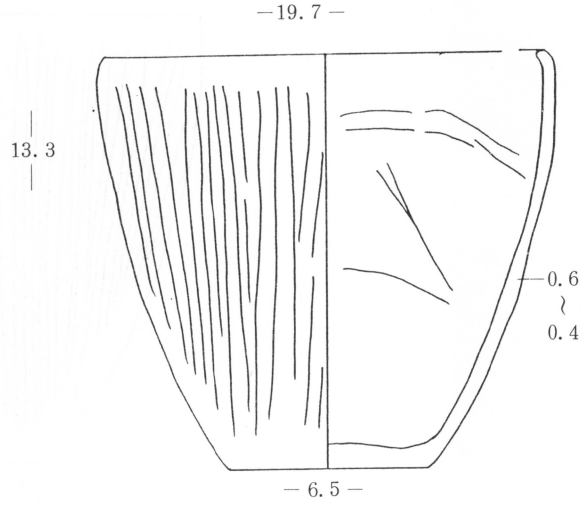
☆　このものは、ＡＮ１ｂ－Ｂ１Ⅱ出土の「大洞Ｃ２式」鉢形土器である。

- 器形は、口縁が平縁で、肩部の張らないもので、口頸部がやや内傾する器形である。なお底面は、上げ底である。
- 施文は、口縁上端が無文で、他の胴～底部直上までは条痕文が施文される。
- 色調は、外面黄褐色一部黒色、内面上半黒色、下半黄褐色を呈する。胎土・焼成ともに良い。

455



ＡＮ１ｂ－Ｂ１Ⅱ

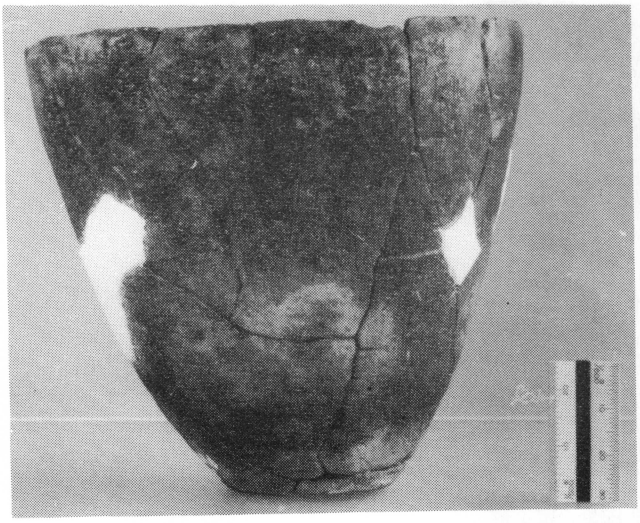


〔晩期の土器〕第７群土器－455　（粗製）

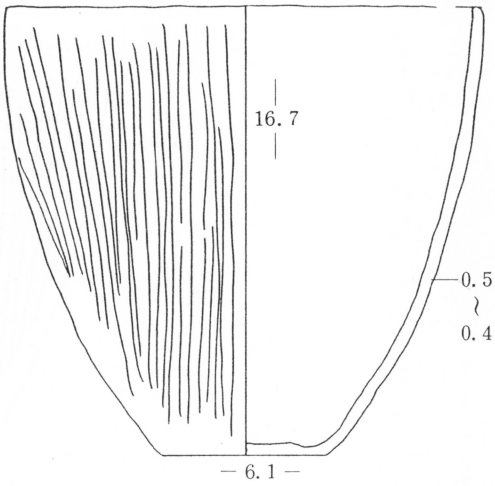
☆　（455）は、ＡＮ１ｂ－Ｂ１Ⅱ出土の「大洞Ｃ２式」鉢形土器である。

- 器形は、平縁で口頸部が内傾し、肩部が丸味をもつ器形で、底面は平底をなすものである。
- 施文は、（454）と同様、条痕文が施文されるが、前者に比べて条痕文が密でないのが、このものの特徴であろう。
- 色調は、外面黄褐色、内面灰褐色で胎土・焼成とも良い。

456



ＡＮ１ｂ－Ｂ１Ⅱ

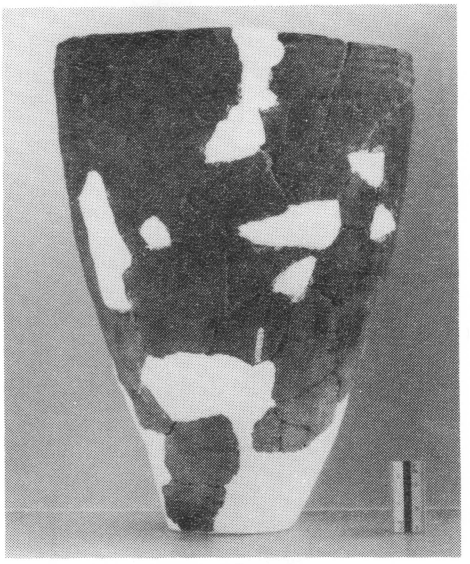


〔晩期の土器〕第７群土器－ 456　（粗製）

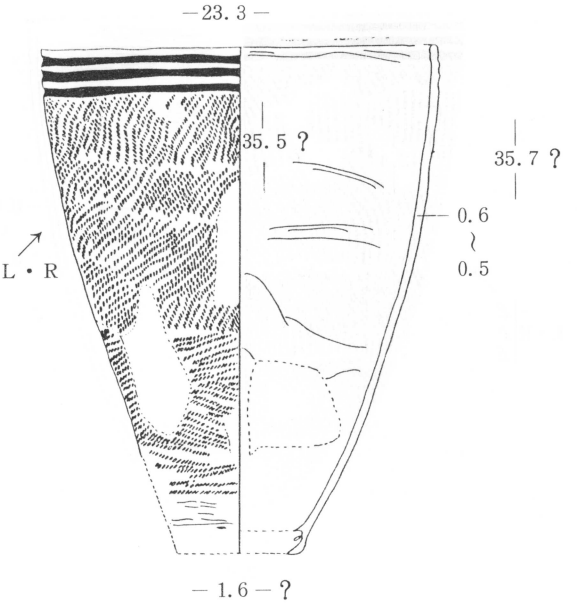
☆　この（456）は、「大洞Ｃ２式」深鉢形土器である。（ＡＮ１ｂ－Ｂ１Ⅱ出土）

- このものの器形は、平縁で口頸部がわずかに内傾するが、肩部が張らず、ややふくらみをもつ胴部から底部に至るもので、底面は平底である。
- 施文は、（454・455）と同様、条痕文が施文されている。この条痕文が施文される土器は、口縁直下が無文帯をなすのが共通する。
- 色調は、外面灰黒色、内面上半灰黒色、下半黄褐色、胎土・焼成は良い。

457



ＡＫ２Ⅲ

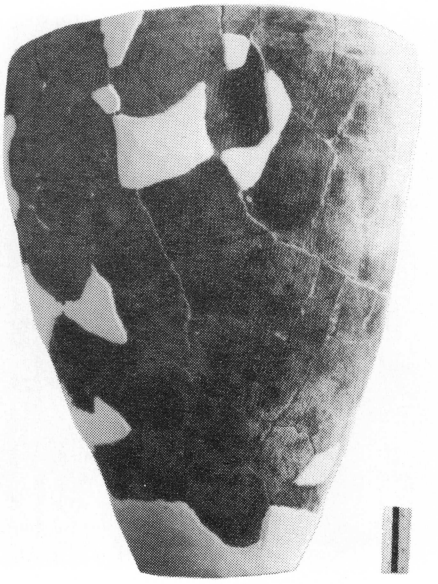


〔晩期の土器〕第７群土器－457　（粗製）

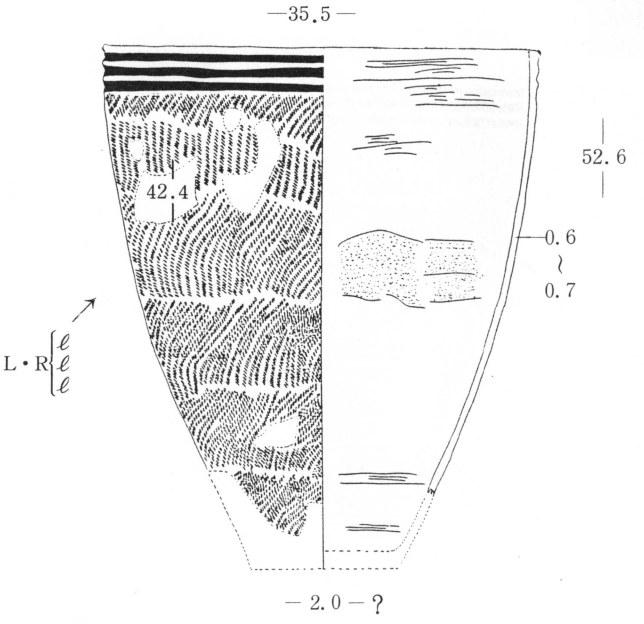
☆　（457）は、ＡＫ２Ⅲ出土の「大洞Ｃ２式」大型深鉢形土器である。

- このものの器形は、平縁で、口頸部がわずかに内傾気味のもので、肩部の張らないスンナリした器形のものである。
- 施文は、口頸部に３条の平行沈線文があり、肩部下には左下りの斜行縄文が施文されるものである。
- 色調は、外面赤褐色、内面黄褐色を呈し、胎土・焼成とも良い。

458



ＡＫ２Ⅲ



〔晩期の土器〕第７群土器－458　（粗製）

☆　（458）は、ＡＫ２Ⅲ出土の「大洞Ｃ２式」大形深鉢形土器である。

- この土器の器形は、口縁が平縁で、口頸部はわずかに内傾気味のものである。また肩部は、わずかにふくらむ器形で、底面はやや上げ底気味のものと思われる。
- 施文は、頸部に平行沈線文が３条、肩部下には、やや左下りの縄文が密に施文されるものである。
- 色調は、外面黒褐色、内面黄褐色を呈し、胎土・焼成とも良い。